

目 次

	頁
1 調査研究の概要	
はじめに	4
1-1 調査研究の目的	5
1-1-1 調査研究の背景	
1-1-2 当調査研究の具体的目的	7
1-2 調査研究の内容	8
1-2-1 調査研究の概要	
1-2-2 テーマと課題	
1-2-3 調査の構成	
1-2-4 スケジュール	
1-2-5 委員会	9
1-2-5-1 委員会の目的	
1-2-5-2 委員会開催日時	
1-2-5-3 委員会テーマ	
1-2-5-4 委員会構成メンバー	
2 国内既存アーカイブ機関の概況	10
「繊維アーカイブ」ヒアリング調査結果要約	
2-1 美術館・博物館の概況	11
2-1-1 ヒアリング先	
2-1-2 設立目的	
2-1-3 収蔵品	
2-1-4 デジタル化への取り組み	12
2-1-5 課題	
2-2 地場産業振興センター・公設試験場の概況	13
2-2-1 ヒアリング先	
2-2-2 設立目的	
2-2-3 収蔵品	
2-2-4 デジタル化への取り組み	
2-2-5 課題	
2-3 産地企業の概況	14
2-3-1 ヒアリング先	
2-3-2 設立目的	

2-3-3	収蔵品	
2-3-4	デジタル化への取り組み	
2-3-5	課題	
3	アーカイブ整備に係わるニーズ	16
3-1	総論	
3-1-1	アーカイブの機能について	
3-1-2	アーカイブのからの発信について	
3-1-3	アーカイブの事業性について	17
3-1-4	アーカイブの人材育成について	18
3-1-5	集積について	
3-2	テキスタイル	
3-2-1	デジタル化と検索性の向上について	
3-2-2	特にハード設備検索の必要性について	19
3-2-3	ワークショップについて	20
3-2-4	日本の意匠と技術を次世代に継承する必要性	21
3-3	コスチューム	
3-3-1	ニーズ	
3-3-2	検索性の向上について	22
3-4	その他	
3-4-1	知的財産権上の留意点	
4	アーカイブ整備に係わる課題	23
4-1	既存繊維アーカイブの課題	
4-1-1	総論	
4-1-2	テキスタイル	
4-1-3	コスチューム	24
5	アーカイブ・ヒアリングの展望	25
5-1	総論	
5-2	テキスタイル	
5-3	コスチューム	26
	ヒアリング個表 (13機関 8社)	27
	おわりに	99

[添付資料]

1. ヒアリング調査の項目
2. 法的意見書
3. 全国美術館・博物館一覧リスト
4. 全国地場産・公設試一覧リスト

はじめに

我が国の繊維産業は、世界から高い評価を得ている高機能素材や匠の技で作られた感性価値の高いテキスタイルの開発力、ファッション・クリエイションではパリコレクション等での日本人デザイナーの活躍、更に、東京のストリートファッションが世界的に注目されている等、新しい可能性を秘めている一方で、繊維産業の規模は、この10年間で半減している状況にあります。

こうした中、繊維ファッション産業の活力を取り戻し、ファッション・クリエイションの水準でも世界に伍していくためには、産地や企業単位だけではなく業界全体が相互連携を図りつつ、効果的に人材の確保・育成を図るとともに、我が国独自のクリエイションを生む土壌を育てることが必要とされています。

そのための環境整備の一環として、繊維ファッション業界の企画開発関係者やデザイナーにとって、新しい製品開発の着想の源泉となる過去の優れたデザイン、匠の技で生み出された素材やアパレル製品等の現物見本、関連するデータを体系的に収集蓄積した「繊維アーカイブ」の整備を行い、より多くの人に活用される仕組みを作ること、併せて、テキスタイル関連事業者の転廃業により過去の貴重なテキスタイル・サンプルの散逸が進んでおり、それを防ぐ手立てを講じることが、早急に求められています。

このような背景のもと、本調査においては、我が国の繊維アーカイブの現状及びニーズの調査を行い、アーカイブ整備に係る問題点や課題を把握した上で、構想実現に向けての展望を行いました。

なお、繊維サンプル収蔵の現状やニーズの聴取、繊維アーカイブの全体構想とアーカイブ整備上の課題と問題点の整理にあたっては、「繊維アーカイブ調査委員会」を組織して指導を仰ぎました。

最後に、本調査にご協力賜りました美術館・博物館、学校資料館等の既存アーカイブ機関、クリエイター、デザイナー、産地組合、産地企業、支援機関の皆様、並びに本書作成にご尽力賜りました委員、専門委員の方々に深甚な敬意を表します。

平成20年3月

独立行政法人中小企業基盤整備機構

経営基盤支援部 繊維産業支援室

1. 調査研究の概要

1-1 調査研究の目的

1-1-1 当調査研究の背景

1-1-1-1 日本の繊維産業で進む企画の空洞化とアーカイブの必要性

日本の繊維産業において、ここ十数年の中国への縫製拠点の大幅な移転と、それに伴う生地の現地調達化等が相俟って、産地・企業では生産の空洞化のみならず、企画の空洞化が進んだ。こうした中で、産地・企業には技能を継承する次世代人材の減少と国内の人材育成基盤の弱体化が進行する中、産地や企業単位だけではなく、業界全体が相互連携を図りつつ、効果的に人材の確保・育成を図ることが求められる。このためには、産業界全体としての人材育成のための環境整備が必要不可欠である。

繊維やファッションに係る技術者やデザイナーにとって、これまでの歴史の中で蓄積されてきた膨大な生地見本、試作品並びにその関連データ等は、新しい製品を生み出すための着想を与える源泉となり得るものであるが、これらの見本は全国産地・企業・教育機関・博物館・美術館等に分散しており、誰もどこに何があるかの全容を把握してない状況にある。従って、活用したくとも求めるものがどこにあるかを一括して検索する仕組みもない状況にある。また、戦後の日本の繊維産業、特に洋装関係は、過去のストックの情報を整備し情報ソースとして活用することより、主に目先の欧州の流行や国内の売れ筋などのフロー情報を拠り所として商品開発を進めてきたきらいがあることや、開発ノウハウが組織で共有されず個人に帰属しているケースが多いこともあって、過去の生地見本や試作品の多くは散逸していることが少なくない。また産地企業の転廃業にともなうテキスタイル・サンプルの散逸も進んでいるのが実情である。

そこで、これら過去の優れたデザインや匠の技、優れた素材や商品に関するデータを体系的に収集・再整理し、これを一括検索できるようにするとともに、見て触ることができるアーカイブについて検討することは極めて有益である。

1-1-1-2 欧米のクリエイションとアーカイブのあり方

欧米では、企業やメゾン（デザイナー工房）単位のサンプル・ストックに加えて、欧州では、フランスのパリ・ルーブル宮モードとテキスタイル美術館、パリ市立モード美術館、リヨン歴史染織美術館、ミュールーズ・プリント美術館、英国のヴィクトリア・アンド・アルバート美術館、ベルギーのアントワープ州立モード美術館、スペインの国立衣装美術館、オランダのハーグ美術館、ドイツにはベルリン、ミュンヘン、デュセルドルフなどの主要美術館にファッション&テキスタイル部門がある。米国では、メトロポリタン美術館を頂点として主要美術館にファッション&テキスタイル部門がある。またメトロポリタン

美術館は、テキスタイルのアーカイブとしてラティセンターを開設した。ニューヨークにはFIT(ファッション工科大学)がある。欧米諸国には、このように左記に挙げた施設をはじめ多くの教育機関や博物館・美術館で各々充実した過去の作品コレクションが現物サンプルとして体系的に収集・蓄積されている。欧米のクリエイションが、こうした過去の優れたデザインや匠の技、優れた素材や商品に関するデータ蓄積に支えられていることは確かである。

しかしながら、日本の繊維ファッションビジネスの歴史や成り立ち、ビジネスモデル、クリエイションのあり方などが、欧米の繊維ファッションビジネスのそれとは、かなり異なっていることもあって、特にアパレル製品においては、欧米と同じようなスタイルのアーカイブ的な情報蓄積環境や仕組みが日本の業界や各企業で欧米並みにすぐ活用されるかどうかは検証する必要がある。

欧米では、すべてのビジネスが「コレクション」から始まる。世界中の小売店のバイヤーは「パリコレクション」「ミラノコレクション」「ニューヨークコレクション」などで、そのシーズンに売る物のほぼすべてを買い付ける。つまり買い手にとっても売り手にとってもビジネスチャンスは、実シーズンの半年前に開く年2回の「コレクション」の場だけしかない。テキスタイルに関しても、コスチューム・コレクションの各々さらに半年前に、「ブルミエール・ヴィジョン・プリュリエル」「ミラノ・ウニカ」等のテキスタイル展示会に合わせて年2回の真剣勝負のテキスタイル開発とその商談会が行われる。

欧米では、シーズンに各1回(春夏物、秋冬物毎に1回開催)の「コレクション」の出来不出来でビジネスの勝敗が決するので、「コレクション」に向けたシーズン毎のクリエイションにかかるエネルギーと集中力は並大抵のものではなく、「コレクション」のクオリティと完成度を上げるために、過去の優れたデザイン、匠の技、優れた素材に立ち返ることは基本的な作業プロセスであり、また、特に欧州のクリエイションは、欧州の長い服飾文化の蓄積をふまえ、それを洗練させ発展させていくのが基本的な流れであるため、過去の優れたデザイン、匠の技、優れた素材、美意識などの原点に立ち返ることは常に行われていることである。

1-1-1-3 日本のクリエイションに合わせた独自のアーカイブ整備の必要性

一方、アパレルを含む最近の日本のファッションビジネスは、SPAスタイルが一般化したこともあって、展示会やショーという形で一応「コレクション」を発表するものの、それですべてシーズンの商売が決するのではなく、むしろ実シーズンに入ってから、現物の売れ筋情報を分析・参考にしながら、期初の商品計画を月毎週毎に軌道修正しつつ、期中で不振商品の生産中止、売れ筋商品の追加生産、新商品の投入などを企画判断してQR対応で生産供給していくビジネス形態が一般的である。つまり日本のファッションビジネスの多くは、過去の優れたデザイン、匠の技、優れた素材に立ち返ることより、現物の売れ筋

情報や目先の海外ヒット商品を参考にして商品企画を組むことに力点を置いてきた。

テキスタイルのクリエイションについても、生地の手元であるアパレルなどの論理、企画を含めた仕事の進め方に影響されて、過去の優れたデザイン、匠の技、優れた素材、美意識に立ち返ってクリエイションを組み立てるというよりも、今、何が流行っているかを主なクリエイション・ソースにしてモノづくりを進めてきた傾向がある。

但し、高度情報化社会である現代において、ファッションは益々世界性を持つものであり、世界全体を視野に入れずして日本の繊維ファッション産業は成立しないということ深く認識する必要がある。つまり、益々グローバル化する市場競争の中で、日本の繊維ファッション産業が生き残り、また今一度国際競争力を持つためには、日本独自のクリエイションが不可欠でありながら、業界全体としてその認識は不十分である。国際競争力を持った独自性の強い商品を作るためには、過去の優れたデザイン、匠の技、優れた素材に立ち返ってクリエイションを組み立てることの重要性は今まで以上に求められることは確かである。また、独自のクリエイションは、消費者の生活文化レベルだけでなく産業レベルの文化的蓄積なくしては生まれない。産業における文化的蓄積こそが、新たなクリエイション・エネルギーに転換していくものである。

日本のアパレル業態は、SPA 化の進展もあって製造卸業から今後さらに小売業に近づく動きもあり、彼らにとって、製品は企画生産するものというよりも、製品は仕入れて販売するものという意味合いが一層強まる傾向がみられる。但し、日本のアパレルファッション産業が今一度国際競争力を持つためには、日本的QRの追求だけでは不十分であり、彼らのクリエイション・ソースとして、過去の優れたデザイン、匠の技、優れた素材を収集・整理したアーカイブの必要性は今後高まる。

1-1-2 当調査研究の目的

今回の調査では、上記実情の見極めも含めて、日本のクリエイション・スタイルに合わせた独自のアーカイブのあり方の提案も大きなポイントとなる。

また、いずれにしても、過去の優れたデザイン、匠の技、優れた素材などが、どこの産地、企業、教育機関、博物館、美術館等に何がどれだけ蓄積されているのか体系的・包括的に把握されておらず、また、これらをいかなる形でアーカイブとして集約・閲覧できるようにすべきなのか、といったノウハウが十分に蓄積されていない状況にある。

このため本調査では、これらサンプル・ストックなどのアーカイブ情報の収集及びアーカイブとしての整備の在り方、利用者のニーズ、活用の可能性等について取りまとめ、日本の繊維産業において利用価値の高いアーカイブの作成に資する。

本調査は、ヒアリング調査と委員会含めた専門家への聞き取り調査などで、繊維アーカイブ構想のイメージや取組むべき課題を明確化する目的で実施した。

本事業における“繊維アーカイブ”の定義は、コスチューム、テキスタイルを中心とする繊維製品の現物並びにデジタル情報化された見本、サンプル、関連データなどを指す。

1-2 調査研究の内容

1-2-1 調査研究の概要

日本の繊維ファッション産業におけるクリエイションの実態を踏まえ、アーカイブの現状とニーズについて調査を行った上で、わが国業界が活用しやすいアーカイブを整備するための方策等について、有識者による委員会にて検討を行い、報告書として取りまとめる。

1-2-2 テーマと課題：

日本の繊維ファッション・クリエイションの基盤づくりとして、過去の優れたデザインや匠の技で生み出された素材やアパレル製品（コスチューム）の現物見本やデータを体系的に収集蓄積した「繊維アーカイブ」の充実強化を目指す。

（具体的には、既存機関の実態、ニーズの在り様、アーカイブ整備の課題等の把握）

1-2-3 調査の構成

調査ブロック	カテゴリー	調査対象
文献調査	繊維全般	内外の各繊維アーカイブ機関資料など
ヒアリング調査	テキスタイル	一宮地場産センター、桐生地場産センター、福井工業技術センター、リソースいしかわ等の各地場産センター・公設試験場並びに産地企業
	コスチューム	文化学園服飾博物館・同FRC、京都服飾文化研究財団、神戸ファッション美術館、杉野学園衣装博物館、共立女子大などの主要服飾美術館・博物館・大学

1-2-4 スケジュール

業務項目	平成19年			平成20年	
	10月	11月	12月	1月	2月
委員会開催			★	★	★
文献調査	●	●	●		
ヒアリング調査					
キーマンヒアリング	●	●	●		
既存機関ヒアリング		●	●		
報告書作成				●	●★

1-2-5 委員会

1-2-5-1 委員会の目的：

ヒアリング調査結果の検討並びに専門家からの聞き取り調査等をふまえて、繊維アーカイブの在り方の方向づけや課題等を審議いただく。

1-2-5-2 委員会の開催日時：12月17日、1月16日、1月28日、2月15日の計4回

1-2-5-3 委員会のテーマ：

第1回委員会（12月17日）：産地のニーズとテキスタイル・アーカイブについて

第2回委員会（1月16日）：既存アーカイブの現状と法的問題等について

第3回委員会（1月28日）：クリエイターのニーズについて

第4回委員会（2月15日）：報告書の方向づけ・内容吟味

第5回委員会（2月15日）：報告書のまとめ

1-2-5-4 委員会の構成メンバー（敬称略）：

委員長

財団法人 京都服飾文化研究財団 理事/キュレーター 深井 晃子

委員

財団法人ファッション産業人材育成機構 専務理事 伊達 彰夫

専門委員

独立行政法人中小企業基盤整備機構

クリエイション・ビジネスフォーラム

支援コーディネーター

松田 正夫

オフィスナガモリ

代表

永森 達昌

伊藤忠ファッションシステム(株) ナレッジプランニング室クリエイティブディレクター 池西美知子

アイエスプランニング

代表

井上佐知子

文化学園ファッションリソースセンター

映像資料館室長

佐藤 俊一

シルク博物館

主幹学芸員

大野美也子

麹町パートナーズ法律事務所

弁護士

近藤 夏

(株)イッセイ ミヤケ

取締役

皆川魔鬼子

(株)ミナ

代表取締役

皆川 明

(株)リューステン

代表取締役

堀畑 裕之

〃

関口真希子

オブザーバー

(財)ファッション産業人材育成機構 IFI ビジネス・スクール部門長 井上 義次

東レ(株) 経営企画室 主幹 松平 俊哉

2. 国内既存アーカイブ機関の概況

「繊維アーカイブ」ヒアリング調査結果要約			
	美術館・博物館など	地場産センター・ 公設試験場など	産地企業
・調査対象先	<ul style="list-style-type: none"> ・京都服飾文化研究財団 ・文化学園服飾博物館 ・文化学園 FRC ・神戸ファッション美術館 ・杉野学園衣装博物館 ・シルク博物館 ・島根県立石見美術館 ・共立女子大 	<ul style="list-style-type: none"> ・福井県工業技術センター ・石川県工業試験場 ・繊維リソースいしかわ ・一宮地場産センター（FDC） ・桐生地場産センター 	<ul style="list-style-type: none"> ・サカイオーベックス ・丸井織物・熊沢商事 ・ケイター・カツクラ ・松文産業 ・稲山織物 ・小林当織物
・現況（1. 総括 2. 特徴 3. 設立目的 4. デジタル・アーカイブ）	<ul style="list-style-type: none"> ・服飾文化、芸術、歴史的な観点からの収蔵品が主である。 ・各機関によって収蔵品の主体は異なるが、現代ファッションの源流である 17 世紀から現代に至るまでのデザイナーのコレクション等コスチュームを中心としたものが多い。 ・テキスタイルに特化した資料集積は少ない。 ・調達・寄贈された貴重な収蔵品をファッション産業、ファッション文化発展のための教育・研究と一部公開を目的として設立。 ・2001 年度経産省の支援によって KCI と文化学園がデジタル化を完了(より使いやすいものにするための最新技術とソフトによる更新も必要)。他機関もデジタル化に着手。デジタル・アーカイブの公開は、著作権、意匠権の切れたもののみ。 ・ストリート系ファッションの街頭着写真のデータベースは、70 年代より現在まで共立女子大で保有。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「繊維リソースいしかわ」は、北陸を代表する化合繊維長繊維織物中心としたサンプル収蔵（その多くは石川県工業試験場が昭和 56 年に立ち上げた「テキスタイルデータバンク整備事業」の貸与）。他に 1800 年代のリヨンやヨーロッパ各地の貴重なサンプル等も。 ・桐生地場産センターは、桐生市からの使用貸借契約により、世界的にも貴重な染織資料や世界の民族衣装を保管管理し、定期的に展示公開している。質量含めて一つのテキスタイル・アーカイブのモデル事例 ・地場産業の技術伝承や技術データを保存する目的としての収蔵。 ・開設当初は利用者が多かったものの、現在は月に数人程度。 ・「繊維リソースいしかわ」「桐生地場産センター」は、デジタル・データベースを保有し公開している。 ・糸・織編物設計などの生地データの解析・デジタル情報化には、1 点約 2 万円かかる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自社ビジネスへのサポート機能を優先して収蔵。 ・ケイターでは歴史的なテキスタイル見本を収蔵。 ・商品開発時に必要な過去の自社製品の糸使い、織組織、加工法などの設計見本として収蔵。 ・非公開がほとんどである（学生を除く）。 ・得意先との商談時にバイヤーのイメージを探る参考資料として販売促進用に収蔵・活用。 ・企業では、ジャガード柄見本など、30 年～40 年と保有しているケースも稀にあるが、短いところでは 2～3 年と、保管場所に限りがあるため保存期間は相対的には短い。 ・一部技術的な資料をデジタル化しているものの、商品企画・意匠開発などを前提としたアーカイブ化にはあまり積極的ではない

課題	<ul style="list-style-type: none"> ・公益性の強い事業であり、単なる収益性や費用対効果を求められると運営は難しい。 ・各機関とも新規調達に充当する予算は少ない。 ・保管管理に多大な費用がかかる。 ・デジタル・アーカイブ公開に際しては、知的財産権(意匠権・肖像権など)問題は不可避。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地場産センター、公設試験場では、技術データに主体に収蔵していることもあって、利用者は産地内部関係者。 ・総括機関への譲渡・公開の可能性は小さい。 ・人的・保管場所などの維持費負担は産地に重荷。 	<ul style="list-style-type: none"> ・企業保有サンプルは、企業秘密事項であるため総括機関への譲渡・公開の可能性は小さい。 ・毛関係、ジャガード含む絹関係に関しては、産地集積は充実しているが、綿関係はジーンズなど特殊なものを除き産地にアーカイブ集積の拠点は無い。
アーカイブ構想	<ul style="list-style-type: none"> ・設立資金支援に加えて、存続(運営費用)を支援する仕組みが重要である。 ・既存アーカイブ収蔵品はオールド・コレクションが中心。コンテンポラリー・コレクションについて、クリエイター作品だけでなく、コスチューム、テキスタイルともにマストトレンドとして売れているものについても、その動向を把握する必要 	<ul style="list-style-type: none"> ・地場産センター、公設試験場の立場からの役割期待は、技術伝承と後継者育成の場、さらには生産機械の保存、過去の生産品の物性データ保存を目的とする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・散逸しつつある繊維産業の技術、歴史、文化資産などをいかに後世に残すかという観点に立ったセンター機能を期待。 ・産学官連携の場としての機能として、それはすなわち国内外のバイヤーが訪れる実戦ビジネスの場としても期待。

2-1 美術館・博物館の概況

2-1-1 ヒアリング先：

京都服飾文化研究財団(KCI)、文化学園服飾博物館、文化学園ファッションリソースセンター(FRC)、神戸ファッション美術館、杉野学園衣装博物館、シルク博物館、島根県立石見美術館、共立女子大学

2-1-2 設立目的：

調達・寄贈された貴重な収蔵品をファッション産業、ファッション文化発展のための教育・研究と一部公開を目的として設立。

2-1-3 収蔵品：

- 各機関によって主体は異なるが、現代ファッションの源流である17世紀から現代に至るまでのデザイナーのコレクション等コスチュームが中心。こうした「オールド・コレクション」については、収蔵品の中味、研究成果とも既存機関でかなり充実したものがある。
- 服飾文化、芸術、意匠史、社会文化史的な観点から重要な意味を持つものが中心。

-) 上記) のコスチュームの「オールド・コレクション」が収蔵の中心である一方、現在売場に並び街で着用・消費されている「コンテンポラリー・コレクション(ライン)」については、一部の国際的に活躍するクリエイターのコスチュームのみ収蔵されている。
-) 現在売場に並び街で着用・消費されている「コンテンポラリー・コレクション」の中で、ナショナルブランド(NB)などマストトレンドを形成するものについては、現状、現物収蔵はされていない。
-) 現在売場に並び街で着用・消費されている「コンテンポラリー・コレクション」の中のマスプロダクト商品の1ジャンルであり、ジャパンオリジナルとして海外でも注目されている「ストリートファッション」については、現物収蔵はないが、共立女子大で70年代から現在に至るまでの約40年にわたる定点観測の街頭着装写真調査の集積がある。
-) テキスタイルに特化した資料集積は少なく、あっても「オールド・コレクション」が補助的な位置付けで一部収蔵されているのみである。テキスタイルについても、現代ファッションを支えている「コンテンポラリー・コレクション」は美術館・博物館には収蔵されていない。

2 - 1 - 4 デジタル化への取り組み：

2001年度経済産業省の支援(高感性ファッション産業創生支援基盤整備補助金)によってKCIと文化学園がデジタル化を完了。他機関もデジタル化に着手。但し、現在のデジタル情報化技術と関連ソフトは、2001年時点と比べて飛躍的に進化しており、既にデジタル化したデータをより使いやすくするための処理スピードや容量のアップ、さらには、360度の立体画像、裁断研究に必要となる作品の裏側画像、パターンや補修記録などの画像情報を新たに加えるためにも、そろそろシステム更新が必要な時期にきているという指摘がある。デジタル・アーカイブの公開は、著作権、意匠権の切れたもののみ。特にパリ、ミラノ、ニューヨークなどの各コレクションの映像資料は、デザイナー、ファッションモデル、カメラマンなどの知的財産権問題に対する配慮から外部利用は現在見合わせている。

2 - 1 - 5 課題

-) 公益性の強い事業であり、単なる収益性や費用対効果を求められると運営は難しい。
-) 各機関とも新規調達に充当する予算は少ない。
-) アーカイブの劣化防止の湿度管理など保管管理に多大な費用がかかる。
-) デジタルアーカイブ公開に際しては、知的財産権(意匠権・肖像権など)問題は不可避。

2-2 地場産業振興センター・公設試験場の概況

2-2-1 ヒアリング先：

福井県工業技術センター、石川県工業試験場、福井県工業技術センター、石川県工業試験場、繊維リソースいしかわ、一宮地場産業ファッションデザインセンター（FDC）、桐生地域地場産業振興センター

2-2-2 設立目的：

地場産業の産業振興、具体的には、技術研究や技術伝承・普及のために技術データを保存する目的としての収集。学术研究を目的にした美術館・博物館とは性格を異にしており、技術データを中心に原則産地内関係者のみの利用。

2-2-3 収蔵品：

- ）産地企業の開発のヒントとして収集したテキスタイル・コンサルタント会社と提携して購入した海外テキスタイル・サンプル
- ）技術研究や技術伝承・普及のために保管している産地内試作テキスタイル・サンプル

2-2-4 デジタル化への取組み：

“繊維リソースいしかわ” “桐生地場産センター” がデジタル・データベース化をほぼ完了しているが、他機関は進んでいない。デジタル化への取組みが遅れている一因は、特に海外サンプルの織編物設計解析とそのデジタル情報化には、一般的に1点約2万円のコストがかかるため保有サンプル全体のデジタル化には経費が膨大にかかる。現存のアナログ・アーカイブの利用者が少ないこともあり、費用対効果の観点から見送られているケースがある。また、最近織編物設計解析を担う技術者が高齢化してほとんどいなくなったという。但し、桐生地場産センターでは産地内に内部スタッフ含めて1点約7千円で織編物設計解析を依頼できる技術者が複数存在するということがあった。

2-2-5 課題：

- ）技術データ主体の蓄積であることもあって、利用者は産地内関係者が中心。
- ）産地外の利用者は、例えばアパレル関係者のテキスタイルの知識レベルが低下したこともあり、テキスタイルに精通した技術者がマンツーマンで張り付いて同伴検索支援をしないと利用者の情報収集が難しいこともあり、利用は限られがちである。

- ）産地内関係者の利用も著しく低下している。要因は、産地で生産する商品の構成変化（ファッション衣料向け素材から産業資材向け素材含む高機能素材へのシフトなど）と、技術データのデジタル化対応の遅れによる技術データ蓄積の脆弱性から利用しにくいことなどがあげられる。
- ）産地企業の転廃業が進む中で、人的・保管場所などの維持費負担は産地に重荷となっている。
- ）産地企業支援のための集積であるので、特に技術データは、公的な総括機関が出来たとしても、そこへの譲渡・公開の可能性は小さい。
- ）産地企業の転廃業に伴うサンプルの散逸に関しては、転廃業企業のサンプルをそのまま寄贈されても、保管スペースの制約に加えて、サンプルの分類・整理、技術的解析、データベースへの入力などに相当コストがかかるため、経費面を含めて現状受け皿になる目処は立たない。受け皿は自分たちとは別の機関か組織に期待するとのコメント。

2-3 産地企業の概況

2-3-1 ヒアリング先：

サカイオーベックス、丸井織物、ケイター、カツクラ、松文産業、
稲山織物、小林当織物、熊澤商事

2-3-2 設立目的：

- ）自社ビジネスへのサポート機能として、商品開発時に必要な過去の自社製品の糸使い、織編組織設計、加工法などが分かる見本を収蔵するため。
- ）自社ビジネスへのサポート機能として、得意先との商談時にバイヤーのイメージを探る参考資料として販売促進用に収蔵。

2-3-3 収蔵品：

自社の試作サンプル並びに量産品サンプル

2-3-4 デジタル化への取り組み：

リストのみデータベース化、現物はハンガー保存が主体。

2-3-5 課題：

- ）保管スペースの問題含めて維持費の費用対効果が問われる中で、企業の保存期間は相対的には短い。短い企業では、3～5年で入れ替えているケースも少なくない。
- ）企業保有サンプルは、企業秘密事項であるため、たとえ公的な統括機関ができたと

しても、そこへの譲渡・公開の可能性は小さい。

)一部技術的な資料をデジタル化しているものの、商品企画・意匠開発などを前提としたアーカイブ化には、費用面からあまり積極的ではない。

3 . アーカイブ整備に係わるニーズ

3-1 総論

3-1-1 アーカイブの機能について

アーカイブは中核施設が必要で、メンバーシップ制のような形で中核施設がメンバーの情報を把握して、マイスター(=個人の技術)と民間企業を結びつける機能を持つことが望ましい。

統合的なアーカイブとして、何かしら中核の施設なりコントロール・センターが必要。ただ全国各地に様々なかたちで散在している資料集積をこれから1ヵ所に集約するというのは、経費面、保存スペース面からみても現実的にかなり難しいと思われる。そこで、全国の各々のアーカイブ機関(民間企業の資料集積も含めて)が、例えばメンバーシップ制のような形式で中核の公的メインハウスの傘下に参画し、互いにデジタル・ネットワーク化することにより、全国どこからでも利用者が平易に検索ができる仕組みができれば大きな前進。

ナビゲーター機関のようなセンターが1つ中核にあって、その傘下に「フレンズ・オブ・アーカイブ」のようなかたちで全国のアーカイブがネットワーク化されているイメージだと思われる。検索支援できる情報は、商品や作品などのモノそのものの情報だけでなく、必要に応じて趣旨に賛同し予め登録している専門家や企業をも紹介できるような仕組みになればよい。“この指止まれ方式”で企業資料などの一部公開やネットワーク化に向けても賛同の輪を徐々に広げていくことが、より完成度の高いアーカイブに向けての本プロジェクトの方向付けではないか。

アーカイブは国会図書館のイメージ。実際に取り寄せができ、その後で、アクセスでき、また企画展もできれば望ましい。

3-1-2 アーカイブからの発信について

収蔵に関しては、オールド・コレクションとコンテンポラリー・コレクションに分けて分類・整理せざるをえないが、展示公開や発信に際しては、古いものでも新しいものでも、一つの連続性・関連性の中で系統立てて見せていくことこそが、現代のクリエイションにアクティブな刺激を与えていくためには必要。94年のKCI「モードのジャポニズム展」は、まさにそのコンセプトで貫かれていて、そこから得た刺激は大変大きい。一方、例えば、民族衣装、ロココ時代の衣装等、非常に貴重な現物資料であっても単体で見せられるだけでは、多くは「すごい」で終わってしまう

のではない。歴史的・文化的・意匠的に系統立てて、現代ファッションや現代生活文化との関連性の中で見せていくことこそが、クリエイター、デザイナー、学生を触発することにつながる。そういう観点からも、コンテンポラリー・コレクションは重要。マスプロダクトのコスチュームについてもシーズンが終わったら同じ物は作れない。

「モードのジャポニズム展」に刺激を受けた。定期的に見られる機会があるといい。一般の人にとっても身近になる。

既存アーカイブの収蔵コレクションに関して、コスチュームのオールド・コレクションだけが充実しているように一般的に思われているが、コンテンポラリー・コレクションを忘れてはならない。“今”というのは刻々と変化している。現時点のコンテンポラリー・コレクションもいずれ数年経てば“過去”になる。要するに、どのような基準と観点で何をどのように収集するかが問題。また、コンテンポラリー・コレクションの中でも、必ずしも有名デザイナー、クリエイター、ブランドだけが次代のクリエイションを触発し活用されるとは限らない。リーズナブルな価格で有名な「H&M」ブランドは、50年代、60年代にマスプロダクションされたものを現代にリプロダクションして成功している。このように、有名デザイナーやクリエイターの作品だけでなく、マスプロダクションされた商品も資料収集対象として見極める必要がある。

コスチューム展示は、デザイナーなどにインスピレーションを与えるための見せ方を、テキスタイル展示は、生地づくりに原材料、製造設備、加工方法、技術が切り離せないこと、また生地がコスチュームのシルエットなどと一体であってやはり切り離せないことを理解させる見せ方を、各々主眼におく必要がある。

オールド・コレクション、コンテンポラリー・コレクションという括りとは少し観点が異なるが、ハードな機能をもつ産業資材素材やインテリア素材のアパレル用途転用がクリエイションとしての新しさを生むことが少なくない。強化繊維など工業繊維のファッション分野での応用に興味あり。これらをアーカイブ収蔵対象の中に入れるかどうかは別として、ハイテク素材は、日本の得意分野でもあり、目配りしておく必要がある。

展示については、常設展（本来のアーカイブ資料） 企画展（プロ向け・アマチュア向けなど対象を変化させる）の2本立てではどうか。

アーカイブ施設は資料収集と平行して、展示会開催やメディア発信等、アクティブなプレゼンテーション力も重要。

3-1-3 アーカイブの事業性について

例えばフランスのミュールーズ美術館の例は、収蔵品の昔の絵柄を企業やデザイナー

ーに 1 年間版権を与えてライセンス料を取ることによって、アーカイブの運営費用の一部を賄っている。欧州にはこうしたビジネス的事業運営を展開しているアーカイブ美術館がいくつかあり、運営のあり方として参考になる。

美術館の収入源は、一般的に 入場料（通常・企画展） 物販販売（ミュージアムグッズなど） 寄付（特にアメリカが多い）の 3 つあるが、独自での運営は難しい。日本の美術館・博物館は、その置かれている文化的風土の違いに加えて、税制面の違いから寄付にコストがかかることもあり、行政・企業などの援助がなければ運営できない。

アーカイブがどういう収集をしているのか、系統をたてて調査をし、マップにして、どこに行けばいいのかクリアに見えると良いのでは。また、ロンドンのビクトリアアルバート美術館ではテキスタイルの実物を見ることができた。可能なら生地の特徴とその生地を使って服になったらどうなるかということを見たい。

3-1-4 アーカイブの人材育成

日本のクリエイション、特にアパレルに関するクリエイション力を高めるにはクリエイティブなテキスタイル・デザイナーの輩出が不可欠。良質で独創的なテキスタイルがなければ、高い競争力のあるコスチュームは生まれない。

テキスタイル関係のキュレーターの育成が必要。

洋服作りのプロセスの中で、テキスタイルの位置、すなわちコスチュームの価値に占めるテキスタイルの意味を認識するような教育が必要。

3-1-5 集積について

テキスタイルを収集する場合には、 学生・新人デザイナーの基礎勉強向け 中堅デザイナーや商品企画担当者のデザイン発想の参考資料向け 高度なプロフェッショナルニーズ向けの 3 段階に分け、利用目的別に収蔵内容、公開方法、検索サービスを整備する必要あり。

ビジネス目的と教育目的、文化性等との調整が課題。

皮革も洋装素材の一つであるが、アーカイブ収蔵対象として範疇に入れるかどうかも含めてその線引きも検討する課題の一つ。

3-2 テキスタイル

3-2-1 デジタル化と検索性の向上について

散逸資料等現物収集も重要であるが、まずはデジタル化推進と、既存アーカイブ施設の検索機能の向上が重要。

製品のデジタルサンプルについてはデザイン見本だけでなく、組成、糸設計、織編組織設計のデータ等も必要。

収集した情報を整理する場合は、素材（品質・組成・組織）、柄（プリント・ジャガード等）、風合い（見た目と手触り）、国内資料か海外資料等、基礎となる分類方法を確立することが必要。

テキスタイルについては、オールドも重要だが、今後の開発につながる新合繊からエコ素材等コンテンポラリーなテキスタイルも重要。コンテンポラリーなテキスタイルについては、常時定点観測して、その動向を把握する必要あり。

何がどこにあるのか等基礎情報を収集しリスト化する必要あり。リストとあわせ、ビジュアルで見せる資料があれば望ましい。

収集すべき情報は、既存アーカイブの 所在地 所蔵資料内容 公開・非公開の別 デジタル化の有無等

基礎情報収集 リスト化 公表の上で、現物にアクセスし、さらにアーカイブを所有する企業とコラボするチャンスを高めるスキーム作りを行ってはどうか。

検索システムについてはテキスタイルに精通していない人でも利用できるようなキーワード設定等の工夫が必要。

3-2-2 特にハード設備検索の必要性について

テキスタイル・アーカイブをただ見ただけでは、デザインのヒントにはなるものの、そのアイデアの具体化は難しい。テキスタイルの再現や開発に際しては、原料組成、糸設計、織編機、応用技術などに精通し、その具体化に向けて指導支援できる技術者を配することが不可欠。今ならそのような技術者は、引退間もない人材含めて日本に存在する。コスチュームは確かにインスピレーションのヒントではあるが、テキスタイルはハードとともに動いているものであり、ハードの資料をそろえる必要がある。どの工場でどんな技術があるのか、（アーカイブでは）道しるべを作り、クリエイターと産地が結びつくきっかけをつくる必要あり。リプロダクションではなく、日本の技術と応用力を独創性につなげていくことが必要。

例えば、織機やニット編機を例にとっても、アタッチメントを変えることによってまったく違った編地や風合いのものができる。テキスタイルのクリーションや開発は、機械設備や調整技術・応用技術などを含めたハードと切り離せないで、テキスタイル・アーカイブについては、関連するハードの特徴やその所在について検索できるデータ・ベースを整備することが望ましい。現在使用されていない織機なども

活用できるのでは。どこにどのような機械が何台あるのかわかれば、連携して使うこともできる。

テキスタイルの開発に取り組む際に、デザイナー側が作りたい感覚的なイメージと、川中事業者の考える糸や織編物の設計、織機や編機といった技術要素を含むハードな次元とは最初の段階では隔たりがある。しかしながら、アーカイブがあれば、それが足がかりとなり、例えば「この生地に近いが、このサンプルをもう少しこういう風合いにしたい」というように具体的なイメージの提示と共有がデザイナーと技術者の間で可能となり、スムーズに具体的な開発やクリエイションにつながっていく。実際に利用することを考えたとき、アーカイブと現実にある企業とが結びついていることが望ましい。

クリエイターのインスピレーションは展示サンプルから得られ、さらにそれを生地として実現するにはハード（生産設備）と技術が必要になる。

ハードと技術に関しては、もちろん糸や織編の設計は基本的な要素ではあるが、最近、プレーンな生地・生機に後加工を駆使しているような表面感や風合いのテキスタイルを開発する試みが多くなっている。つまり、アーカイブを利用したテキスタイルの開発も、糸や織のパート毎のアプローチだけでなく、糸、織編、染色、後加工を一貫としてトータルに考えるべき。

3-2-3 ワークショップについて

年1回、オランダのティルブルグ市にあるテキスタイルミュージアムでワークショップが開催されている。ティルブルグ市は繊維の町であり、ミュージアムはもともとブランケット工場にあった設備を利用している。ワークショップは、ヨーロッパ並びに世界各地からウェブなどで募集し、プレゼンテーション資料をもとに選抜された15名~20名のプロの主にテキスタイル・デザイナー（インテリアを含む）が参加。講師が出した課題に対して、3日間でミュージアム内にある織機、編み機、刺繍機、染色プリント設備などを使って、自分のイメージするサンプルを作成するという構成。また作成されたサンプルの量産化に向けては、ミュージアムが有料ではあるが極めて割安な料金で相応しい設備と技術のある民間企業を紹介する支援システムがある。

繊維アーカイブ構想の将来的なイメージとしては、こうした産業美術館的機能の一つであるラボ（試作実験室）的な要素を組み込むことによって、単なる資料集積という静態的なものを超えて、新しい商品開発、プロダクト・イノベーション、人材育成に具体的につながる可能性をもった施設になるのではないかと。特に機械設備と技術者が必要なテキスタイルの開発は、デザイナーのアイデアがあっても、サンプル作りまでの技術的試行に費やす時間、労力、設備などにコストがかかるため、

その具体化はなかなか困難であるが、このようなサポート技術者と設備のあるラボが割安に利用できる仕組みがあれば、素材開発を活発に試みる土壌が育ってくるのではないか。

(デザイナーが)プリントの企画開発にチャレンジしようとした際、当初具体的な取っ掛かりがなく困っていた時に、八王子の染色企業のオーナーが主宰する勉強会を兼ねた染色に関するワークショップに参加した。そこで実際にプリントを刷る等の現場体験ができた。経験豊富な技術者や専門家のアドバイスを受けながら、身体で覚え体験してみることは、本や資料を読んで学ぶことでは得られない貴重な勉強であり、得がたい経験となり、以降の仕事に役立っている。

人材が育っていく過程でワークショップ的な体験は重要。学生や若い人たちにとって、最終形を見ただけではその途中のモノづくりの過程がわからない。大学で開催している、学生だけでなく子どもや一般人向けのワークショップでは、子供はもちろん若い人も大人も非常に興味を持ち人気が高い。やはり、いろんな技法を自分のものにしていきたい、身につけたいという学生や若い人たちの一番初期の段階で、指先などを動かして実際に体で覚えて学ぶというのは、一番必要なこと。アーカイブはプロだけでなく、業界の初心者も勉強できるものである必要がある。

3-2-4 日本の意匠と技術を次世代に継承する必要性

日本の伝統デザインについては、伝統工芸柄だけでなく、大正～昭和初期のふだん着用着物柄を集積する等柄のルーツを明確にしたアーカイブとし、現代のデザインに活せるよう整備してはどうか。

洋装服地の産地以上に、和装(着尺)の産地はさらに危機的な状況。着物を着る人が少なくなったことが根本にはあるが、支えていたその技術も途絶えつつあり、あと5年でなくなってしまう技術さえあるのではないか。今回のアーカイブ構想の中に、和装の着物地を収蔵対象に組み込むことで、ライフスタイルの変化などにより、たとえ着物を着る人がますます少なくなったとしても、その技術や意匠を生き残らせ次代に継承していける可能性が出てくる。

日本の着物の意匠やその再現技術を残し、それを今後の日本独自の新しいファッション創生のヒントにしていくためにも、和装の織・染・刺繍・縫いなどの各工程をワークショップ形式で技術的に見せ体験させる仕組みが必要となる。

3-3 コスチューム

3-3-1 ニーズ

コスチュームのデジタル・アーカイブは、各種プレゼンテーション用イメージマップ作成の際必要な画像を編集するため デザイナーがクリエイション発想の際、アイデアや着想を得るために必要。

コンテンポラリーなコスチュームについては、一部国際的に活躍するクリエイターのものも収集されているが、NB（ナショナルブランド）等マストレンドなものについては収集されていないため、今後はその動向把握について検討の必要あり。

3-3-2 検索性の向上について

映像アーカイブの検索利用者は学生が多いが、基本的な専門知識が十分でないため、正しい検索用語を入力すること自体困難なことがある。よって専門的な用語にこだわらず、インターネット検索に慣れた学生レベルも考慮した方が良いのではないかと。

3-4 その他

3-4-1 知的財産権上の留意点

HP上に全国の繊維アーカイブを紹介し、個々のアーカイブHPへリンクをはるようなものであれば、知的財産権上の問題は特段発生しない。

実際に資料を集積する場合、量産されるような実用品には原則として著作権は発生しない。また、意匠権も設定登録がなければ発生しない。よって原則的には、「美術工芸品」でない限り展示対象となるほとんどの繊維アーカイブ資料について著作権・意匠権は発生せず、著作権者・意匠権者の許可を要しないと解される。

ただし、衣服等に付される登録商標には商標権、衣服のデザインや生地には十分な獨創性・周知性がある場合には不正競争防止法上の問題が発生することがある。

著作権のある衣服・生地の現物を写真撮影する行為は著作権法上「翻案」に該当し、著作権者の許諾が必要。また、著作権のない衣服・生地を撮影する場合でも、その所有権を有する既存のアーカイブ等が写真撮影について制限を加える場合があるので、別途、所有権者との交渉が必要となる場合もある。

(3-4-1「知的財産権上の留意点」について、詳しくは別添【法的意見書】(参考資料2)を参照)

4 . アーカイブ整備に係わる課題

4-1 既存アーカイブの課題

4-1-1 総論

コスチュームについては、京都服飾文化研究財団（KCI）、神戸ファッション美術館等ある程度集積・分類されデジタルでも発信されている状況に比べ、テキスタイルの整備が課題。

また、日本の繊維・ファッション情報の発信は主に国内になっており、世界への発信が課題。国内だけでなく世界の企業が日本の繊維・ファッションの情報を知りたいと思ってもアクセスするポイントが整備されていない。

4-1-2 テキスタイル

4-1-2-1 何がどこにあるのか全貌がわからない

産地にあるアーカイブ資料については、所在、収蔵内容、公開の別等現状すら不明

テキスタイル見本等資料だけでなく、現在どの企業にどのようなマシンや技術があるのかが不明でクリエイターが探し出すのが困難

4-1-2-2 一部テキスタイル・アーカイブは存在しているが、十分利用されていない。

大阪繊維リソースの例等ある程度アーカイブが収集されデジタル化されているが利用率が低い。

桐生のようにある程度利用されているものについても、中央レベルでは繊維関係者の間ですら十分に周知されていない。

文化学園等学校関係のアーカイブについては公開を一部制限している。

4-1-2-3 4-1-2-2の原因について

公的機関の例では、設立当初予算も付け設備投資をしたとしても、継続予算やメンテナンスを適切にできる人材の関係で、レベルを維持したり、状況の変化についていくことができず、情報が陳腐化することにもない利用率も低下。

桐生のようにアーカイブ施設としてある程度活動している機関についても情報発信が不十分で、存在について周知が十分とは言えない。中央に集中的な発信機関がないことも一因。

学校関係については主に所属学生のための教育施設であるため、その他業界に

については会員組織にする等公開は制限されている。

4-1-3 コスチューム

テキスタイルに比べれば、京都服飾文化研究財団（KCI）、文化学園服飾博物館、神戸ファッション美術館等ある程度集積しているが、特にコンテンポラリーの収集が十分になされていないことや、各アーカイブを網羅的に紹介する機能がないことが課題。またそれぞれのアーカイブ・サイトで一部所蔵品をデジタル化しているが、より使いやすさと活用度を上げるためには、グレードアップを含むシステム更新も課題。

5 . アーカイブの展望

5-1 総論

統合的なアーカイブとして中核機関があり、その傘下に全国のアーカイブがメンバーシップのような形式でネットワーク化されているイメージ。

検索については、会員間でアーカイブ情報をデジタルネットワーク化することにより、全国どこからでも利用者が検索できる仕組み。

さらに商品等モノそのものの検索情報だけでなく、必要に応じ登録されている専門家や企業を紹介したり、ワークショップ等を企画できるような仕組みがのぞましい。

企業資料等の一部公開やネットワーク化に向けて会員組織を広げる方向性。

5-2 テキスタイル

(1) アーカイブのニーズ

アーカイブ資料保有施設・企業（所在地、収蔵内容、公開・非公開別）のマップがまず必要。また生地見本についてはデジタル画像だけでなく、生地サンプルの組織・糸設計・組織データ等も必要。

アーカイブ資料施設だけでなく、デジタルや現物等で見た生地を使用して製品を作るときに協力できる企業とつなげることができるよう、現在稼働している川中企業（所在地、機械、技術、特徴、作品）の情報を収集・公開してほしい。

中核機関は東京で産地とのネットワークが重要。

実際に稼働するのは産地企業・アーカイブであるが、中核機関は情報発信という面で東京に設置し、産地とネットワーク化することが必要。また、情報更新、アーカイブの機動的活動のためにも中核機関に技術もわかる人材を置くことが重要。

技術情報も公開するところから、全面公開ではなく会員組織とし、ある程度閉じられた中でアーカイブ組織を作ってはどうか。

アーカイブ機関の紹介だけでなく、マッチング事業やワークショップを行う“産業美術館”的要素を含むべき。

(2) 実現のイメージ

第1段階

中核機関及びメンバーシップの検討。

中核機関及びメンバーシップのあり方等全体的な機能について検討。

第2段階

アーカイブマップ策定。リンクを張りネットワーク化。

第3段階

デジタル化。アーカイブ資料等可能な限りデジタル化し、検索分類方法を確立。

なお、第1段階からアーカイブがクリエイターとアーカイブ登録企業とのマッチング事業やワークショップの計画・実行できるよう検討を開始する。

(3) 留意点

公的アーカイブの例のように立ち上げ時に予算があったとしても、継続的に経費を取り続けることは容易ではないことから、ビジネスとしても成立する方策についても検討する必要あり。また、産地の自治体との連携も課題。

アーカイブ中核機関をどこにするのか。技術も理解でき、ワークショップ企画能力もある優秀な人材確保が重要。

当初から世界に発信するよう英語での対応も考慮に入れる必要あり。

5-3 コスチューム

テキスタイルとコスチュームとの連携も視野に入れ、テキスタイル分野の有識者も当初から検討に参加する。逆にテキスタイル・アーカイブの構想検討に際してはコスチューム分野の有識者をメンバーに加える。

アーカイブマップ策定の際は、コスチュームの美術館も挿入し、繊維・ファッションアーカイブとして国内外に発信。

デジタル情報の更新。

ヒアリング個表

ヒアリング実施先一覧

〔美術館・博物館など〕

京都服飾文化研究財団（KCI）
文化学園服飾博物館
文化学園ファッションリソースセンター（FRC）
神戸ファッション美術館
杉野学園衣装博物館
シルク博物館
島根県立石見美術館
共立女子大

〔地場産センター・公設試〕

福井県工業技術センター
石川県工業試験場
(株)繊維リソースいしかわ
(財)一宮地場産業ファッションデザインセンター（FDC）
(財)桐生地域地場産業振興センター

〔産地企業〕

サカイオーベックス(株)（技術継承の意味で産地に必要論）
ケイター(株)（スポーツ等の高機能織物、カジュアル織物等の小ロット高級品の WJ
織機・AJ 織機大手工場）
松文産業(株)（国内最大のレピア織機ファッション織物製造）、
(株)カツクラ（我が国を代表する高級インテリア織物工場）
丸井織物(株)（北陸最大の W J 織機の量産型工場）
稲山織物(株)（化合織撚糸織物の大手）
小林当織物(株)（複合繊維使いの高級婦人服地製造）
熊澤商事(株)（高級テキスタイルを商売している産元商社）

ヒアリング個表（１）

美術館・博物館・資料館 関係

- ・ 京都服飾文化研究財団
- ・ 文化学園服飾博物館
- ・ 文化学園ファッションリソースセンター（FRC）
- ・ 神戸ファッション美術館
- ・ 杉野学園衣装博物館
- ・ シルク博物館
- ・ 島根県立石見美術館
- ・ 共立女子大学

京都服飾文化研究財団（KCI）

所在地	〒600-8864 京都府京都市下京区七条御所ノ内南町 103
電話	075-321-8011
設立	1978 年
運営規模	年間 8,000 万円（基本財産 12 億円）
施設規模	1,220 m ² (ワコール京都ビル内)
スタッフ	17 名（うち 2 名不定期）
保管点数	11,000 点
ヒアリング担当者	新居理絵氏（学芸課：アソシエイト・キュレーター）

1. 資料・サンプルの継続保管を始めた経緯

ワコールの創業者である塚本幸一氏が、西欧の衣服文化を学び、それを歴史的展開の中で研究する機関として「服飾研究室」を社内に設置したことが起点となる。同研究室は、欧米の衣裳秘術館を視察し、国内外の研究者や収集家に聴取しながら、衣裳美術館設立の企画を立案。1978 年に文部省の認可を得て、当財団が設立される。収蔵品はワコール服飾研究室が収集した作品の寄贈で、ここから西欧の服飾及び服飾に関する文献や資料を体系的に収集・保存し、研究・公開する活動が始まった。

2. 特徴的なこと

同財団の特徴は、ワコールの企業メセナの一環として活動している点と、美術館の施設を持たずに公開する、という“脱ハコ型”で活動している点にある。収蔵品は 11,000 点にのぼるが、基本的な公開は 5 年に 1 度、京都国立近代美術館において現物展覧会を行っている。そして、当財団は日本独自のスタイルを確立した日本人デザイナーの活躍を支援するため、高品質で明解な情報を世界に向けて発信することを使命としている。また、設立当時からメトロポリタン美術館衣装部門とマネキン製作会社の七彩と協力し、「KCI 時代マネキン」を開発してきた。これは 18 世紀から 20 世紀初頭までの代表的な 4 タイプのシルエットに対応し、特別なジョイントにより人体と同じような動きを可能にしている。「KCI 時代マネキン」は世界の美術館で採用され、イタリア、アメリカ、イギリス、フランス、オーストラリア、オーストリア、ドイツなど 10 カ国以上の国々で使われている。

3. 保管資料サンプルの内容・構成

現在の収蔵品は現物資料が 11,000 点、文献資料 13,000 点。設立以来、近世以降それぞれの時代を代表する西欧服飾品と下着、それらに関連する文献資料の収集を行っている。収蔵品は、点数ベースで 80%が国外、20%が国内の資料ととっている。国内資料は 20 世紀後半の作品が中心である。

4. 入手・保管の基準・方法

17世紀から現在までの服飾資料、なかでもその時代にファッションナブルであったものを基準に収集している。現代衣裳を除く多くは、ワコール服飾研究室が収集した作品の寄贈によるもの。また、現代衣裳の中には1,000セットに及ぶコム・デ・ギャルソンからの寄贈品を筆頭に、クリスチャン・ディオール、シャネル、ルイ・ヴィトン等、世界的なメゾンからの寄贈品も含まれている。ちなみに、現物資料の調達金額は資料によって異なり、数十万円から数百万円のものまでである。

5. 保存の形態

収蔵品は、常時温度20℃、湿度50%の保存環境で収蔵し、劣化の原因となる紫外線や害虫、カビの侵入を避けている。原則的に収蔵庫の公開はしていないが、資料の寄贈企業などからの要請によって、デザイナーなどに収蔵資料を見せる例もある。最近ではLVHMの調査グループ5人がまる1日かけて収蔵資料を視察した。但し、そのときでも収蔵庫には1回の入場は5名までと制限した。これも収蔵内の環境保全のためである。

6. 利用活用の状況

同財団では収蔵品から厳選した作品を中心に、年3回程度小企画展を開催している。京都府教育委員会の許可を得て、博物館相当施設として公開活動を行っている。これまでに実施した「華麗な革命」「モードのジャポニスム」「身体の夢」「COLORS ファッションと色彩」など、京都国立近代美術館をはじめとする他館と共催した大規模な企画展は、新しいファッション展への興味を呼び起こし、その流れをリードしてきたと自負している。

新しい研究成果を総括する展覧会図録のほか、研究誌『DRESSTUDY(ドレスタディ)』を年2回発行している。また、KCIの収蔵品約400点を掲載した「ファッション：18世紀から現代まで 京都服飾文化研究財団コレクション」(タッシェン社、ドイツ)を発行し、10ヵ国語に翻訳されている。

【主な活動】

- ・オープンセミナー
- ・博物館実習
- ・スタディ・ルーム公開
- ・その他レクチャー、講演等

このほか財団では、新しい研究成果を総括する展覧会図録のほか、研究誌『DRESSTUDY(ドレスタディ)』を年2回発行している。また、収蔵品約400点を掲載した『ファッション：18世紀から現代まで 京都服飾文化研究財団コレクション』(タッシェン社、ドイツ)を発行し、10ヵ国語に翻訳されて世界に発信している。

【主な研究誌・図録】

研究誌

- ・ DRESSTUDY (ドレスタディ)(1982年春～継続発行中)

展覧会図録

- ・ 浪漫衣裳展 (1980年)
- ・ アンダーカバー・ストーリー(1983年)
- ・ 布に魔術をかけたヴェニス巨人 フォルチュニイ展 (1985年)
- ・ 華麗な革命 ロココと新古典の衣装 (1989年)
- ・ モードのジャポニスム キモノから生まれたゆとりの美 』(1994年)
- ・ モードのジャポニスム TOKYO (1996年)
- ・ 身体の夢 ファッション or 見えないコルセット (1999年)
- ・ COLORS ファッションと色彩：VIKTOR&ROLF&KCI(2004年)

書籍

- ・ 京都服飾文化研究財団の25年 企業文化の創造 (2003年)

ビデオ・DVD

- ・ 華麗な革命 ロココと新古典の衣装 (1989年)
- ・ モードのジャポニスム キモノから生まれたゆとりの美 (1994年)
- ・ モードのジャポニスム TOKYO (1996年)
- ・ 身体の夢 ファッション or 見えないコルセット (1999年)
- ・ COLORS ファッションと色彩：VIKTOR&ROLF&KCI (2004年)

他社出版物

- ・ ファッション：18世紀から現代まで京都服飾文化研究財団コレクション(10カ国語版) タッシェン社、ドイツ、2002年
- ・ ICON 版(アイコン版/抜粋版) ファッション：18世紀から現代まで京都服飾文化研究財団コレクション(7カ国語版) タッシェン社、ドイツ、2004年
- ・ タッシェン社25周年記念スペシャル・エディション ファッション：18世紀から現代まで京都服飾文化研究財団コレクション(4カ国語版) タッシェン社、ドイツ、2005年

7. デジタル化への取り組み

2002年に経済産業省の高感性ファッション産業創生支援基盤整備補助金によって、デジタル・アーカイブを製作した。収藏品(衣装、下着、アクセサリ等)約11,000点の文字と画像データが閲覧可能となっている。このうち650点が高精細画像である。デジタル化にあたっては、ドレスなどの下着までを復元し、作品を美しく見せるための着せつけに注力し、時間をかけて製作した。一方、デジタルアーカイブを検索する仕組みも検討、誰にでも理解できるキーワードを考案した。18世紀から20世紀までの200

年を10のエポックに分割し、各エポックの典型的な衣裳の“影絵”を作った。この影絵と年代がキーワードであり、利用者は影絵をクリックすると、その時代の収蔵品画像が数点表示される。表示の中から好みの作品を1点選ぶと、年代や素材などの文字情報や拡大画像を見ることができる。

8. デジタル情報の提供方法と利用状況

スタディ・ルームにおいて、収蔵品のデータベースを「KCI デジタル・アーカイブ」として、完全予約制・有料で公開している。KCI ホームページ上でも収蔵品200点の画像と文字データを公開している。また、東京・青山のスパイラルビルの1階においても、収蔵品約300点を閲覧できるデジタル・アーカイブを無料で公開している。

【スタディー・ルームの利用状況】

- ・ 公開時間：毎週月・水曜日 午後1:00～5:00（完全予約制）
- ・ 料金：1時間＝1,000円（2時間目は500円）1回2時間まで。同時閲覧は2名まで。プリントは別料金。
- ・ 内容：収蔵品約11,000点全件の文字、画像データ。約650点の高精彩画像。
- ・ 場所：京都服飾文化研究財団。

9. 他社・他機関への公開・開示

同財団が主催する展覧会で公開するほかに、他館が主催する様々な展覧会に出展協力の要請を受け、展示している。メトロポリタン美術館やパリ国立衣装テキスタイル美術館などの衣装美術館からの出展要請は、同財団の収蔵品の質の高さを裏付けている。また、国内外の美術館への出展協力に加え、国内の美術館に着装の協力を行っている。衣装展示技術に関して特別なノウハウを積み上げ、世界的にも高く評価されている。

10. 維持運営の問題点、

空調などの維持管理コストが高むことと、収蔵品の増加に伴い収納スペースの拡大が難しい。また、デジタル・アーカイブに関しては、知的財産権の整備が喫緊の課題である。これが整備されないと、コレクションなどの公開ができない。

11. 他社とのネットワーク

博物館学芸員資格の取得に必要な「博物館実習」の単位認定機関である。1979年以降、日本で数少ない服飾を扱う機関として、特色あるプログラムを実施してきた。ファッションは、今や美術館展示品の一分野となっている。その分野をリードしてきたKCIは、マネキンの扱い、時代衣装の着せ付けなど、世界的に評価されるファッション展示技術を蓄積しています。実習ではその一部に触れ、ファッション展の開催に不可欠な基礎的知識を伝えます。

12．繊維及び服飾ファッション資料の散逸状況への見解

企業保有の各種資料が散逸している状況に対して、早期に対策を講ずることが必要である。同財団にも、企業から資料寄贈の話が持ち込まれることが目立つようになった。散逸を防ぐためには、当該地域の美術館や博物館が寄贈を受け入れるほか、デジタル・アーカイブを作成して保存することが望ましい。

13．統括機関（設立された場合）への資料提供

どういう形で資料提供するのは、今後の検討が必要になるが、デジタル・アーカイブの相互利用は可能と思われる。

14．今後の計画

デジタル・アーカイブに関しては、360度の立体画像や裁断研究に必要となる作品の裏側、パターンや補修記録の画像などを加えたい。

文化学園服飾博物館

所在地	〒151-8529 東京都渋谷区代々木 3-22-7 新宿文化クイントビル
電話	03-3299-2387
設立	1979年
運営規模	年間1億円
施設規模	1,683 m ² (展示スペース 714 m ²)
スタッフ	10名 (うちアルバイト3名)
保管点数	20,000点
ヒアリング担当者	植木淑子氏 (学芸室室長)

1. 資料・サンプルの継続保管を始めた経緯

1979年に文化学園が創設したもので、現物資料は2万点を収蔵。すぐれた実物資料による教育・研究を目指し、服飾の専門博物館を設置することは、学園の創設当初から構想され、資料の収集が積極的に進められてきた。2003年に現在地に移転し、新装オープンした。

2. 保管資料サンプルの内容・構成

(1) 日本

日本関係のコレクションとして、三井家伝来の着物がある。三井家は江戸時代には豪商、近代には財閥として知られ、その着物は優品として高い評価を受けている。近代の宮廷服も、天皇、皇后をはじめ、皇族が着用した装束や洋服が多数含まれている。また、彦根藩主井伊家旧蔵の能装束は様々な演目に対応できる多くの種類が揃い、このほかに武家服飾、庶民の服飾、袋物や髪飾り、正倉院裂(しょうそういんぎれ)、名物裂(めいぶつぎれ)などがある。

(2) ヨーロッパ

西洋関係では、18世紀から20世紀にかけての各時代のドレスを所蔵し、ロココ、エンパイア、ロマンティック、クリノリン、バスル、アール・ヌーヴォー、アール・デコなどスタイルの変遷が分かる。また、オートクチュールのデザイナーの作品として、その創始者であるウォルト、シャネル、ディオール、バルマン、サン・ローラン、クレージュなどのドレスがあり、付属品の帽子、靴、バッグ、パラソル、扇なども多数所蔵している。ほかにチェコやルーマニアなど東欧の民族衣装も所蔵。

(3) その他

アジア・その他の地域では、それぞれの地域の民族衣装を中心に所蔵し、中国清朝の宮廷衣装、パレスチナ地域の民族衣装、インドネシアやインドの染織品などはまとまったコレクションとなっている。近年は、アフリカや中南米、中央アジアなどの民族衣装や染織品の収集にも力を入れている。裂(きれ)類ではエジプトのミイラの包み布やコプト裂、インカ裂などが、装身具では古代新羅の金製装身具、中

近東やインドなどの銀製装身具などがある。

3．入手・保管の基準・方法

ほとんどが有償調達で、調達のカテゴリーは、衣服、服飾品、染色品、工芸品で、これらを時代別・地域別に構成している。現在の地域別収蔵比率は、日本、西洋、その他地域が3等分されている。

4．保存の形態

恒湿・恒温の収蔵庫で保管され、年に1回燻蒸を行い防虫している。主な保管設備は次の通り。

- ・たんす
- ・ロッカー
- ・箱類（中性紙を使用＝長尺者は単価8,000円）
- ・棚
- ・ボディ（西洋用と和用）
- ・マネキン（約50体＝時代によって体形が異なる）
- ・衣桁（いこう＝着物を掛けておく家具）

5．利用活用の状況

年間4万人が訪れる。1年に4回の企画展を行っており、1回の企画展に1万人前後が訪れている。設立目的の一つが同学園の教育資料の充実となっており、同学園（大学・短大・専門学校）の学生の利用（入場料無料）が多い。その他の利用者は多岐にわたるが、細かくはデータ化されていない。ただ、小学校の総合学習用に利用される例が増えている。また、非公開収蔵品の一般公開は原則として行っていないが、一部有償で公開する例もある。

【主な出版物】

- ・紋織の美と技 絹の都リヨンへ
- ・世界の伝統服飾～衣服が語る民族・風土・ころ～
- ・文化学園服飾博物館名品選
- ・日本服飾の美
- ・三井家のきもの
- ・西アジア・中央アジアの民族衣装
- ・ヨーロッパ・ファッション
- ・世界の刺繍

【入場料】

- ・一般 500円

- ・大学・専門学校・高校生 300 円
- ・小中学生 200 円
- （20 名以上の団体は 100 円引き）

6 . デジタル化への取り組み

2001 年度の経済産業省の「高感性ファッション産業創生支援基盤整備補助金」によって収蔵品のデジタル化に着手、約 1 億円（半額助成金）の費用をかけて、所蔵品の中から 2,000 件、10,000 点余りの画像をデジタル情報として実用化している。画像情報は、ドレスを例にとると正面と背面、それとディテールの部分写真（最大で 20 数カット）で構成されている。同館では、1980 年代から手書きによる収蔵台帳を作成、そこには作品の特徴(アイテム、年代、生地 of 材質、色柄、模様など)を分類・整理しており、これをもとに収蔵品データベースをデジタル化した。

【デジタル情報のテキスト】

- ・数量
- ・分類（例：衣服 日本 洋服）
- ・名称（例：ドレス[大礼服][マント・ド・クール]
- ・材質（例：絹[縞子]、ビーズ、バロックパール、ラインストーン）
- ・技法（例：刺繍）
- ・文様（例：花、唐草）
- ・世紀（例：20 大正時代末～昭和時代初期）
- ・スタイル・様式
- ・デザイナー・作家
- ・国名・地域
- ・民族・部族
- ・着用者（例：女性）
- ・用途
- ・由来（例：朝香宮家旧蔵 朝香宮允子妃着用）
- ・寸法

【デジタル・アーカイブの検索方法】

- (1) 大分類
- ・限定しない
 - ・その他
 - ・衣服
 - ・染織品
 - ・付属品

(2) 小分類

- ・ 限定しない
- ・ 日本 着物
- ・ 日本 公家装束
- ・ 日本 武家装束
- ・ 日本 能装束
- ・ 日本 民俗服
- ・ 日本 洋服
- ・ 外国 女子服
- ・ 外国 男子服
- ・ 外国 子供服
- ・ 外国 その他
- ・ 被り物
- ・ 肩掛類
- ・ 帯類
- ・ 手袋類
- ・ 携帯品
- ・ 履き物
- ・ 装身具
- ・ 布製品
- ・ 布・裂
- ・ 染織用具
- ・ 裁縫用具
- ・ 化粧用具
- ・ 生活用具
- ・ 雛形
- ・ 人形
- ・ 絵画
- ・ 書籍
- ・ その他

(3) 世紀

- ・ 限定しない、1～3、5～6、7、8、11、12、16、17、17～18、18、18～19、19、19～20、20

(4) 国・地域

- ・ 限定しない、国別表記

(5) キーワード

7. デジタル情報の提供方法

同館の端末で、6,000件、30,000点余りの画像と、高精細画像50点が公開されている。このほか同館のホームページからも閲覧できる。

8. 運営・保管に関する問題点

- ・ 恒湿・恒温の収蔵庫で保管するため、空調費用が運営コストの多くを占める。
- ・ 防虫のために使用する保管箱（中性紙製）も高額となる。
- ・ 新規収蔵の増加に伴い収蔵スペースが手狭になる。
- ・ 専門スタッフの人員不足。
- ・ 同学園学生以外の入館者の目的が把握できない。

9. 他社とのネットワーク

1年に4～5回、ほかの博物館や美術館への貸し出しがある。

10. 繊維及び服飾ファッション資料に関する見解

欧米に比べると施設の絶対数が不足している。

文化学園ファッションリソースセンター（FRC）

所在地	〒151-8521 東京都渋谷区代々木 3-22-1
電話	03-3299-2111（代表）
設立	1999年
運営規模	年間 4,000 万円（人件費除く）
施設規模	1,000 m ²
スタッフ	18 名
保管点数	衣服 6,000 点、アクセサリー 5,000 点、コレクション写真 112,000 点、テキスタイル 9,400 点（デジタル情報含む）
ヒアリング担当者	関間正雄氏（センター長）ほか

1. 資料・サンプルの継続保管を始めた経緯

1999 年に同学園の附属機関として開設。その構成は、テキスタイル資料室、映像資料室、コスチューム資料室、企画室によって運営されている。このように多彩なファッション情報を収集・分析・提供するセンターは、我が国の教育機関ではほかに類例がないものとなっている。同センターは、総合的なファッション活動の情報拠点を形成し、教育や研究に役立つよう資料の充実化と合わせ、施設準備の整備も行っている。

2. 特徴的なこと

ファッションリソースセンターとしては教育機関だけでなく、産業界においても類例のない機能を備えている。教員・学生を対象とした現物と映像、さらにデジタル化された資料は、実学教育を支えるツールとして大きな効果をもたらしている。

3. 保管資料サンプルの内容・構成

- ・多数の布地サンプルを系統的に整理・保有するテキスタイル資料室。
- ・パリコレクションなどファッションを中心とした映像資料を保有する映像資料室。
- ・ファッション服飾関連実物資料を蓄積してきたコスチューム資料室。

【テキスタイル資料室】（データ数：9,000 点）

テキスタイルに関する資料と情報を多面的に提供し、常時 8,000 点を超える基本的な素材から最新のトレンド素材まで、デザイン発想を豊かにする布地を収集・展示している。テキスタイル検索コーナーでは、コンピュータ入力によりテキスタイル・フォルダーラックから実物資料を取り出すことができ、パソコンコーナーでは、テキスタイルデザイン・ソフトで先染織物やプリント柄がデザインできる。ハンガー見本コーナーでは展示されている布地を自由に手で触れて素材を確認でき、スワッチコーナーには、マッピングなど自由に使える布地がある。そのほかに実物サンプル添付のテキスタイル関連書籍や情報誌も充実している。

【映像資料室】(コレクション写真：112,000点)

様々な映像資料を DVD、ビデオ、パソコン等を利用して視聴するための施設。ファッションに関する資料は多数あり、毎年、世界各地で発表されるコレクションの中からパリ、ミラノ、ロンドン、ニューヨーク、東京の各ブランド、デザイナーの作品が、DVD で見ることができる。また、1946 年のパリのオートクチュール作品から現在まで 5 大都市のコレクションの画像データをパソコンで検索し、プリントすることも可能。DVD は毎月新しい映画等を補充している。見たい資料は、室内の専用ブースで見ることができる。

【コスチューム資料室】(資料数：コスチューム 6,000 点、アクセサリ 5,000 点)

文化服装学院、文化女子大学のファッションショー作品、公開講座作品を中心に、著名なデザイナー作品、企業の製品、装苑賞をはじめとする各コンクール受賞作品など多種多様な服飾資料の実物作品を約 30,000 点収蔵している。実物資料は、レディース、メンズ、子供服、和服、帽子、靴、その他のアクセサリまでを網羅、学院・大学各科各クラスのカリキュラムに合わせて貸し出され、デザイン、素材、作図、縫製、着装などの授業用参考資料として、学習効果を高めている。当資料室の利用は本学園の教職員を原則としている。

【企画室】

ファッションリソースセンター (FRC) 全体での企画、運営及び対内外の連絡、問い合わせや折衝窓口としての機能を有している。FRC 案内パンフレット、FRC だよりの発行、ホームページも業務の一環。また、ファッション情報に関連する要望、相談にのれるようテキスタイルメーカー、産地、デザイナー、アパレル企業などと学園をつなぐ窓口としての機能も強化しつつある。また、テキスタイル、映像、コスチューム資料室の有機的な連携のもとで、多数の企画展を行い、教職員・学生向けに様々なファッション情報を発信している。

4. 入手・保管の基準・方法

各資料の収集にあたっては、2005 年に「業務基準集」を作成し、この基準に沿って調達している。テキスタイル資料は、国内外の繊維企業の協力を得て無償供与で収集しているものが多い。1 点につき 1.3 m²のサンプルを年間 300 点収集している。海外サンプルについては、教職員が出張したときに交渉するケースもある。コスチューム資料は、前述の通り文化服装学院や文化女子大学のファッションショー作品、公開講座作品を中心に、著名なデザイナー作品、企業の製品、装苑賞をはじめ、各コンクール受賞作品などの実物作品を収蔵している。1 年間に収集するのはコスチューム 200 点、アクセサリ 500 点。また、映像資料は多くが有償による収集で、コレクション情報の写真は文化

出版局から、動画は INFAS 社から購入している。

5. 保存の形態

コスチューム資料は、アイテム別に全長 9 m のロータリーハンガー（移動式ハンガーラック = 9 台）のほか、アクセサリは専用ケースや収納箱で保管している。テキスタイル資料は、32 台の見本用ハンガーなどで保管。映像資料は DVD などを開架式の棚での保管となっている。

6. 利用活用の状況

本学園の学生や教職員への情報提供はもとより、日本のファッション教育・産業界にも情報公開、交流を促し、世界のファッション情報センターとして機能することを目指している。年間の利用者数は 25,000 人(延べ人数・学生のみ)

【主な企画展】(年間 10 回の開催)

- ・企画展(2007年4月)Happy Anniversary Cake 展
- ・企画展(5月)FRAPBOIS EXHIBITION
- ・企画展(5月)世界の ONLY ONE 素材「ソアロン展」
- ・セミナー(5月)パート1:土田晃啓氏による「ソアロンのテキスタイル開発」
- ・セミナー(5月)パート2:山室一幸氏による「モードテキスタイルの可能性」
- ・企画展(5~6月)「パイルの競演」
- ・企画展(6月)『matohu 「慶長の美」長着展』
- ・講演会(6月)『matohu 「慶長の美」長着展』
- ・(7月)『YLANG YLANG EXHIBITION 2006S/S archive -Light my fire-』
- ・企画展(9~10月)『JOTARO SAITO “キモノ百鼠”展』
- ・企画展(10月)『DRESSCAMP 展』

7. デジタル化への取り組み

デジタル化への対応では、映像資料にあるコレクション(各国のファッションショーなど)のうち 1946 年から現在にいたる 112,000 枚のポジフィルム(文化出版局所有)をデジタル化している。初期費用には 3 千万円を要した。テキスタイル資料では、ほぼすべての現物資料をデータベースに取り込んでいる。その点数は 9,400 点に及ぶ。

8. デジタル情報の提供方法

FRC の端末での利用が原則となっており、約 20 台の端末からデジタル・アーカイブを閲覧できる。2008 年からは同学園内に LAN が配備される予定で、これが稼働すると教室からデータを検索したり、データ出力したりすることが可能となる。

9. デジタルの利用状況

FRC の利用は同学園の教職員と学生に限られている。とくに映像資料のコレクション情報は、デザイナーをはじめファッションモデルやカメラマンなどの知的財産権がクリアされにくく、外部の利用ができない状況にある。その他の利用については、2006年に「ファッションリソース・クラブ」を発足し、賛助会員、校友会員、卒業生会員などに登録すると、FRC 内でのデジタル・アーカイブの利用、学生との商品企画に関するコラボレーションなどの利用ができる。外部利用では、中学校の社会見学のための利用が増えている。

10. 保管に関する問題点

資料の増加に伴う収蔵スペースの確保。

11. 他社・他機関への公開・開示

知的財産権がクリアされれば、デジタル・アーカイブの交流は可能である。

神戸ファッション美術館

所在地	〒658-0032 兵庫県神戸市東灘区向洋町中 2-9-1
電話	078-858-0050
設立	1997年
運営規模	年間2億千万円
施設規模	14,772 m ²
スタッフ	7名
保管点数	現物資料1万点、生地見本約3万点ほか
ヒアリング担当者	浜田久仁雄氏(主席学芸員)

1. 資料・サンプルの継続保管を始めた経緯

1973年に「ファッション都市宣言」を打ち出した神戸市が、ファッション性豊かな都市空間を創造し、センスあふれる街づくりを目指す「神戸」のシンボルとして1997年に開館した。基本構想は1988年に着手している。

2. 特徴的なこと

地上5階建て総面積14,000 m²という規模は、国内最大のファッション美術館である。機能としては、アートをテーマにした「ミュージアム」、ファッション産業の振興支援とクリエイターの情報・教育・交流を目的にした「リソースセンター」、様々な発表機会を提供する「ホール」の3つで構成されている。同美術館は「神戸ファッションプラザ」の18.7%を買い取り、区分所有している。3階にあるライブラリーでは、国内外のファッション関連の蔵書約28,000冊のほか、20世紀初頭からのファッション雑誌のバックナンバーが閲覧できる。仏・米・伊のVOGUEやELLEのほか、最新ファッションがわかるスタイル・マガジン、インテリア雑誌などが充実しているほか、ビデオ、LD、CDなど視聴覚資料も揃えている。同美術館の施設内容は次の通り。

- ・ 1階 展示室、ファッション目的室、事務室
- ・ 2階 「神戸ゆかり美術館」事務室
- ・ 3階 ライブラリー
- ・ 4階 ギャラリー、ファッション資料室、セミナー室
- ・ 5階 多目的ホール、収蔵室(5～6階)

3. 保管資料サンプルの内容・構成

収蔵品の収集は1992年から開始している。その内容は、衣服、服飾品、染色品、工芸品で、これらを時代別・地域別に構成。作品は、西洋、日本とも18世紀から20世紀までのものが中心になっている。収集にあたっては展示できる作品が原則となっており、展示できない作品は扱わない方針である。現在の収蔵数量は、衣服が5,000点で、そのうち半数が海外品である。ちなみに民族衣装は73カ国のものが収蔵されて

いる。

【収蔵資料の内容】

1) 服飾・コスチューム

・ 20 世紀の衣装：

ガブリエル・シャネルのジャージー・ドレス（1927 年）やクリスチャン・ディオールのポウル・ガウン（1957 年）など 20 世紀を代表するデザイナーによるオートクチュールの衣装や、時代の流行などをテーマにしたコレクション。

・ 19-20 世紀の衣装：

ロココ時代の優雅な宮廷衣装、ナポレオン時代のドレスなど、ヨーロッパを中心とした歴史的な衣装と服飾小物のコレクション。

・ 民族衣装：

インドの染色技術の集大成ともいえるマハラジャの衣装、色彩豊かな韓国の婚礼衣装など、多くの地域で現在も残っている特徴的な民族衣装のコレクション。

・ テキスタイル：

世界各地に様々な形で伝えられている更紗や絞りなど、洋の東西を越えた染色技法の広がりに関連を概観することができるコレクション。欧米各地のオリジナル・テキスタイルのほか、フランス、イタリア等の産地の古い生地見本からなるオールド・コレクション。

・ マリン・ルック：

神戸にふさわしいマリンをテーマとした衣料品。マリン・カジュアルウエアで 70 種類以上の欧米ブランド製品。マリン・ユニフォーム分野では世界各地（17 カ国）からウエアやグッズ、さらに 10 種類以上の世界の豪華客船グッズと乗務員制服を収集。

・ 神戸アパレル：

神戸ブランドの記録資料として、神戸ファッション協会（KFA）加盟各社から寄贈。プレスキットを含む 11 社 15 ブランドを収集。

2) AV・映像

・ 映画（フィルム）：世界のクリエイターに影響を与えたストローク＝ユイレの作品。

・ ミュージウム映像：専門家の監修による解説シリーズ等。

・ ビデオ・LD・DVD：衣装美術が優れた映画、環境映像、コレクション・ビデオ等。

・ ファッション関連スライド：1970 年代からのデザイナーのコレクション等。

・ CD-ROM・**阻止**：1950 年代以降の音楽史を概観できるコレクション等。

4. 入手の基準・方法

内外のファッション及び関連資料で、現物資料に関しては展示可能な状態のものを収集している。

5. 保存の形態

恒湿・恒温の収蔵庫で保管され、コスチュームのオールド・コレクションは、特別注文で製作した大型(高さ9m)の桐ダンスで保管している。桐は防湿性に優れており、160cm×120cmの引き出しに1点ずつ、畳まずに収納している。その他の作品は中性紙製の保管箱などに収納している。

6. 利用活用の状況

1年間の来館者は20万人に達し、そのうち有料入場者数は3万人で、毎年、20～30%の増加を示している。ちなみに入場料は一般が500円、小中高生・65歳以上が250円。展示は、テーマを決めて行なう「特別展示」と、衣服を様々な切り口で紹介する「ベーシック展示」がある。特別展示は年4回の開催で、2008年には、次のようなテーマが計画されている。

- ・ 風が綴った布 - 薄布(うすぎぬ)のドレス展(2007年10月20日～1月15日)
- ・ 華やぐころ - 大正・昭和のおでかけ着物(2008年1月26日～4月6日)
- ・ ポワレとフォルチュニィ展 - コルセットをめぐる冒険
(2008年1月26日～4月6日)
- ・ チャイナ・チャイナ・チャイナ - チャイナ・ドレス(清朝から現代まで)
(2008年7月12日～10月7日)

このほか、各種のセミナーを定期的で開催している。

- ・ 第1回 KOBE ベストドレッサーナイト
変革するメンズファッション～今の時代 空気感を読み解く(2006.10.27)
- ・ 第2回 販路拡大! インターネット活用法
本当に成功するインターネットを活用した新しいビジネスモデル(2007. 1.25)
- ・ 第3回 ファッションビジネスを目指す人たちへのメッセージ
WOMENS WORK～神戸発! ファッションを楽しくする女性たち(2006.12.11
～2007.3 下旬)
- ・ 第4回 神戸でおしゃれにアートを遊ぶ MUSEUM PARTY
変革するメンズファッション～今の時代 空気感を読み解く(2007. 3. 4)
- ・ 第5回 神戸グッズ開発セミナー
楽しく快適な神戸グッズをいかにデザインするか(2007. 3.27)
- ・ 第6回 AHN MIKA によるファッショントーク
ファッションの表現者「モデルという職業について」(2007. 9.11)

7. デジタル化への取り組み

ライブラリー(テキストイル)の3,000点をデジタル化しているが、コスチュームは

08年から着手する予定である。その時代のファッションをリアルに表現する、というのがデジタル化にあたってのテーマであり、このため収蔵品の1点毎にマネキンのポーズや背景を作成。これによって費用だけでなく、撮影に伴う製作時間が増大する。デジタル・アーカイブの製作にあたっては、これまで収蔵品のレプリカ作成でコラボレーションをしてきた大阪樟蔭女子大学とタイアップし、インターンシップの一環として取り組む計画である。具体的には、08年に予定されている東京などで開く展覧会用に製作するカタログ写真をデジタル・アーカイブ用に撮影し、巡回展を開催する毎にデジタル情報を増やしていく。

8. デジタル情報の提供方法

デジタル化が未着手であるため、今後、検討する。

9. デジタルの利用状況

同美術館のホームページで、特別展示の解説や収蔵庫などの模様を動画で配信している。

10. 保管に関する問題点

収蔵品の増加に伴い収納スペースが手狭になることと、空調コストが嵩むこと。

11. 他社・他機関への公開・開示

神戸市以外の巡回展覧会を実施しており、08年には東京の目黒美術館での開催が決まっている。

13. 他社とのネットワーク

美術館・学校・企業の連携は密にしている。オールド・コレクションが触れられるように毎年、1着ずつ3者連携によるコラボレーションで、レプリカを作成している。学校が収蔵品のレプリカを作成し、これに用いる生地の復元を企業が担当。これを館内で展示し、入場者は手袋をはめたうえで作品に触れることができる。

14. 繊維及び服飾ファッション資料の散逸状況への見解

資料の散逸も問題であるが、日本はファッション・ミュージアムが不足している。デジタル・アーカイブの整備も必要であるが、ファッション関連資料は現物資料であることが重要である。

杉野学園衣裳博物館

所在地	〒141-8652 東京都品川区上大崎 4-6-19
電話	03-6910-4413
設立	1957 年
運営規模	
施設規模	2,000 m ²
スタッフ	4 名
保管点数	1,400 点
ヒアリング担当者	隅田登紀子氏（学芸員）

1. 資料・サンプルの継続保管を始めた経緯

1957 年に創立者の杉野芳子氏（故人）が欧米で収集した服飾資料を中心に開設したもので、日本初の服飾博物館である。西洋衣裳、西洋小物、日本衣裳、民族衣装、スタイル画、マネキンなど 1,400 点を収蔵している。

2. 特徴的なこと

服飾教育の資料が目的となるため、同学園の学生による利用が多い。1957 年当時に 3,000 万円を投じて建設した博物館のほか、86 年には分室（地下 1 階 - 地上 3 階）を設け、収蔵庫並びに学芸課程実習室、企画展示場にあてている。

3. 保管資料サンプルの内容・構成

収蔵資料は、西洋衣裳、西洋小物、日本衣裳、民族衣装、スタイル画、マネキンなど 1,400 点で、ほとんどが 20 世紀初頭までの“オールド・コレクション”である。開館以前に収集されたものが 90% を占め、その後の収集資料は 10% でしかない。

4. 入手・保管の基準・方法

収蔵品の 9 割は故杉野氏が海外で購入したものである。寄贈品に関しては、寄付に関する問合せが増えているが、同館の収蔵基準を満たすものが少ない。その基準とは、歴史的な価値があるかどうか、教材としての価値に合致するかどうかで、運営委員会での承認が必要になる。

5. 保存の形態

恒湿・恒温による保管を行い、衣裳ダンスと保管箱（中性紙製）で保管している。

6. 利用活用の状況

常設展示のほか 1 年に 1 回の企画展を開催している。同学園の学生を除くと、産業人よりも一般生活者の来館が多く、年間の入場者数は 3,000 人。

7. デジタル化への取り組み

2000 年からデジタル情報をホームページで公開している。現在は、検索コードを含めて利用しやすい仕組みを検討中。

8. デジタル情報の提供方法

同館のホームページで閲覧できる。

9. デジタルの利用状況

学生を含めてデジタル・アーカイブの利用は高まっているが、利用データを収集していないため、実数の把握ができていない。

10. 保管に関する問題点

収納スペースが不足することと、空調など維持管理がコスト高なること。

11. 他社・他機関への公開・開示

公的な博物館、美術館への公開は可能。

12. 他社とのネットワーク

神戸ファッション美術館とは組織的な交流が多く、KCI が開催する学芸員研修会に受講している。

13. 統括機関（設立された場合）への資料提供

提供の形態にもよるが、原則的には協力していきたい。

シルク博物館

所在地	〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町1番地
電話	045-641-0841
設立	1959年
運営規模	年間経費：1億4千万円
施設規模	地下2階 - 地上9階 建築面積：24,644 m ² (ビル全体) シルク博物館 (2F~3F)
スタッフ	4人 (キュレーター資格保有者3人)
保管点数	4,244点 (図書：5,878冊)
ヒアリング担当者	大野美也子

1. 設立の経緯

同館は、横浜開港百年記念事業として、神奈川県・横浜市・関係業界の協力によって1959年3月、開港当初にイギリスの商社ジャーディン・マセソン商会（英一番館）のあったところに、「シルクセンター国際貿易観光会館」が建設され、その重要な事業部門として開設された。

同館は絹の科学、技術の理解や絹服飾の工芸美の鑑賞の場を提供するとともに、絹の需要を促進することを目的としている。また、これらを通じて国際観光の振興を図るとともに、世界でも数少ない絹に関する施設として多くの人たちに親しまれている。ちなみに母体となる財団法人シルクセンター国際貿易観光会館の出資構成は、次の通り。

基本財産 293,638,575円

出資の内訳（円）

神奈川県	500,000
横浜市（現金）	500,000
横浜生糸取引所	200,000
横浜商工会議所	200,000
横浜生糸問屋協会	200,000
横浜生糸取引所商品取引員協会	200,000
日本生糸輸出組合	200,000
社団法人横浜貿易協会	200,000
社団法人横浜銀行協会	200,000
日本製糸協会	100,000
ジャパンシルクアソシエーション	100,000
神奈川県工業振興協議会	100,000
社団法人日本絹人織織物工業会	50,000
小計	2,750,000
自己積立額	290,888,575

2. 特徴的なこと

絹知識の普及、絹の科学・技術への理解及び絹服飾工芸美の鑑賞の提供等と、それを通しての絹製品の需要促進を目的に各種事業を展開している。博物館の運営にあたっては、「シルク博物館運営委員会」を開催し、意見を聴取している。1999年には1億5,000万円をかけて大幅な館内改装を実施した。

- ・ 常設展示

蚕の生態から絹製品のできる過程、時代衣装、絹服飾、蚕織錦絵などを常設展示

- ・ ミニ企画展

常設展示の中で一体のテーマを定めて小コーナーを設け展示

- ・ 特別展示

春及び秋に特別企画により特別展を開催

- ・ 組み紐の実演と講習会の開催

和装に使う組み紐の技術の普及

- ・ 手作り真綿の講習会の開催

真綿作りの技術の普及

- ・ 教育支援事業

「親と子のかいこの自然科学教室」の開催

理科教材用蚕種配布（小学校に配布）

博物館実習生の受け入れ

- ・ 絹関係講演会の開催・アウトリーチの実施

- ・ 関係資料等の作成・販売

- ・ その他

シルクミュージアムショップへの協力、絹関係団体事業の後援費

3. 保管資料サンプルの内容・構成

- ・ 資料:3,685 点

- ・ 写真・ビデオ等：559 点

- ・ 図書資料：生糸、絹、織物、服飾品等の関係図書：5,878 冊

4. 資料サンプルの入手方法

年間の資料調達金額は300万円、寄贈は少なく、資料価値のあるものを1点ずつ購入している。

5. 施設の形態

(1) 1階

- ・身近な生活（衣・食・住）に使われていることを展示。
- ・蚕などについて学習するコーナー。機織りの体験ができ、春から秋には蚕の飼育観察もできる。
- ・家蚕や野蚕の生態や繭から糸が作られる過程、糸の種類と、それらを原料として織られ、染められてくいろいろな工程を展示。
- ・世界の絹と民族衣装：絹を使った世界の民族衣装を展示。

* イベントホール

* ミュージアムショップ

横浜スカーフをはじめ、シルク入り食品や生活用品などの衣食住にかかわる絹製品や蚕等関係書籍を販売。

(2) 2階

- ・古代から現代までの衣装を時代考証のもとに復元して展示。
- ・「着物」の織りや染めについて代表作品を展示。

6 . 利用活用の状況

同館の年間入場者数は約 3 万人。活用状況は次の通り。

- ・ 休館日：月曜日（月曜日が祝日の場合は翌日）、年末年始（12月28日～1月4日）
展示替のため臨時休館することがある。
- ・ 開館時間：午前 9 時～午後 4 時 30 分（入館は午後 4 時まで）
- ・ 料金（カッコ内は団体 = 20 人以上）
 - 一般 500 円（400 円）
 - シニア（65 歳以上）300 円（200 円）
 - 高大学生 200 円（150 円）
 - 小中学生 100 円（50 円）
- （ ） 障害者は無料、特別展は別途料金

【特別展（2007 年秋）】

- ・ 旧山辺知行（やまのべともゆき）コレクション - インドの染織展

財団法人遠山記念館所蔵の世界的な染織研究家、山辺知行コレクションからインドの染織作品約 150 点を展示紹介。経緯緋のパトラ、カシミアショールなどの貴重なインドの染織作品を通してインド文化への理解を深め、日本とインドの友好を進める一助となることを目的として開催。

主 催：シルク博物館

出品協力：財団法人遠山記念館

後 援：インド大使館、日印協会、横浜ムンバイ友好委員会、神奈川県、横

浜市、神奈川新聞社、T V K、N H K 横浜放送局、繊維貿易会館、
東京織物卸商業組合、横浜繊維振興会、横浜織物商組合

会 期：平成 19 年 10 月 1 日（月）～11 月 2 日（日）

展示内容：インドの染織作品約 150 点（財団法人遠山記念館所蔵・旧山辺知行
コレクション）インド紹介写真約 50 点

講 演 会：

インドの染織と日本

知られざるインド染織の技と美

インド東・西・南・北 染織の世界への誘い」パート

インド東・西・南・北 染織の世界への誘い」パート

サリーの楽しみ方

サリーの試着

インド古典音楽への誘い

島根県立石見美術館

所在地	〒698-0022 島根県益田市有明町5番15号
電話	0856-31-1860
設立	2005年10月
運営規模	2億1,000万円
施設規模	16,000 m ² (芸術文化センター全体) 展示場面積 = 2,000 m ²
スタッフ	10名 (コスチューム担当は1名)
保管点数	コスチューム100点 (その他を含めると1,200点)
ヒアリング担当者	南目美輝

1. 資料・サンプルの継続保管を始めた経緯

島根県立石見美術館は、県立いわみ芸術劇場と併存した芸術文化複合施設(島根県芸術文化センター)にあり、この施設は別称「グラントワ」と呼ばれる。石見美術館では3つの収集方針をもとに、特色あるコレクションづくりをすすめている。

・ファッション

ファッションという概念を広くとらえ、西洋服を中心とした「服飾関連資料」「ファッション雑誌」「ファッション写真」、またファッションとかかわる「現代美術」、さらには美人画などの女性を表現した美術作品まで、バラエティに富んだ作品群を収集している。

・森鷗外ゆかりの美術家の作品

津和野出身の作家・森鷗外は、さまざまな芸術家と交流を持っていた。鷗外と美術との関わりを検証するため、鷗外と交友のあった作家の作品を収集する。

・石見の美術

石見地方のゆかりのある美術家の作品や、石見にちなんだ題材を表現した作品を収集する。

2. 特徴的なこと

同美術館は、ファッションに特化したものではなく、絵画などの美術品を主体とした“総合型”の美術館にファッションを収蔵していることに特徴がある。美術館としては後発となるため、島根県にゆかりがあって、他の美術館にない特色を出すため、ファッションを扱った。デザイナーの森英恵氏は同県出身であり、公立美術館でのファッション収蔵が少ないことから、ファッションを収集方針のひとつに位置づけた。

3. 保管資料サンプルの内容・構成

19 後半から 20 世紀の西洋コスチュームを収蔵。森英恵氏初期の作品のほか、20 世紀初頭のスポーツウエアがある。その内訳は次の通り。

- ・ コスチューム 100 点
- ・ テキスタイル 60 点
- ・ ファッション雑誌 数 100 点
- ・ ファッションプレート（版画） 1000 点
- ・ その他、有名写真家のファッション写真なども収蔵
森英恵氏の作品（10 点含む）

4. 入手・保管の基準・方法

アーカイブの調達はすべて有償で、ファッション美術品を専門に扱うディーラーを通じて購入している。アーカイブの買い増しについては、予算内で調達している。また、ファッション・アーカイブの扱いにあたっては、京都服飾文化研究財団（K C I）や神戸ファッション美術館の指導を受けている。

5. 保存の形態

恒湿・恒温の収蔵庫で保管され、コスチュームのオールド・コレクションは、大型の桐製引き出しのある収納具で保管している。

6. 利用活用の状況

「 Grantow 」では、さまざまなイベントが開かれており、芸術劇場に来館した見学者も多い。その多くは一般の人たちで、業界関係者は少ない。来館者の内訳は県内と言外が半々である。

【主なファッション関係の催し】

- ・ ファッションの 20 世紀（2005 年 10 月～06 年 1 月）
- ・ ファッションプレート（版画）の世界（06 年 1 月～2 月）
- ・ サッカーユニフォームと民族衣装（03 年） ワークショップ
- ・ 『おしゃれ』を写す - ファッション写真と女性（07 年 12～08 年 2 月）
- ・ モダンガールズあらわる。昭和初期の美人画展（08 年 2 月～4 月）

7. デジタル化への取り組み

収蔵のコスチューム・アーカイブは全品がデジタル化されており、同美術館のホーム

ページで公開している。検索は作者、作品名、作品のカテゴリー（工芸、国外油彩画、国内油彩画、写真、水彩画、素描・下絵等、テキスタイル、デザイン画、日本画、版画、ファッション雑誌、服飾、立体）によって出力される。製作にあたっては、撮影者以外は同美術館の職員が担当した。

8. デジタル情報の提供方法

同美術館のホームページで公開。

9. デジタルの利用状況

ホームページにカウンターを設けていないため、訪問者数などは未定。

10. 保管に関する問題点

コスチュームを担当するキュレーターが1名しかいないため、慢性的な人手不足が続いている。

11. 他社・他機関への公開・開示

美術館・博物館においては、要請があれば貸し出しをしている。

12. 他社とのネットワーク

企画展示に関しては、他の美術館や博物館の収蔵品を借り受けて開催。このため、他のファッション美術館や大学、研究所とのネットワークは密である。なかでも神戸ファッション美術館との関係が深い。

共立女子大学

1. 画像資料

共立女子短期大学生活科学科デザイン研究室のサイトでは、原宿、渋谷、銀座、代官山のストリートファッションを毎月報告している。同研究室のスタッフが撮り続けているもので、これと寄贈された1960年代からのストリートファッション写真を加えると、40年間にわたる10万点の画像が保管されている。これまで経済産業省との話し合いで、この画像をデジタル・アーカイブにする計画があったものの、担当官の人事異動により計画が休止した状態になっている。

2. アーカイブ整備

ファッション関連のアーカイブ整備については、アパレル企業が参考となる資料を集積し、様々な用途に使えるような方法が必要である。とくに重要になるのが検索システムであり、学術的な検索システムだけでなく、一般の人たちが利用しやすい、ファッションに関するシソーラス（同義語・類義語などを分類・整理した語彙集）が必要である。服飾関連のデジタル・アーカイブでは国立民族博物館のシステムが参考になる。

【同博物館のアクセサリ・身装文化デジタル・アーカイブ】

(1) 検索方法

- ・全項目のいずれかに以下の すべて いずれか の語を含む
- ・標本番号に以下の すべて いずれか の語を含む
- ・地域名に以下の すべて いずれか の語を含む
- ・現地アクセサリ名に以下の すべて いずれか の語を含む
- ・現地アクセサリ名ヨミに以下の すべて いずれか の語を含む
- ・現地アクセサリ名英字に以下の すべて いずれか の語を含む
- ・収蔵場所に以下の すべて いずれか の語あるいはコードを含む
- ・布地特性に以下の すべて いずれか の語あるいはコードを含む

D11:絵緯(経)を用いた織物 D12:緋 D13:うね織 D21:搦織 D22:つづれ関連組織
D23:パイル組織 D24:その他の変化組織 D30:ニット;ネット;1本のひも;糸による
あみもの D34:プレイティング;スプラング;ポピンレース;2本以上のひも;糸による
組み物 D35:不織布 D36:刺繍;キルティング;刺し子;シャーリング;darning D37:つ
めもの;綿いれ D38:やわらかい材料のアプリケ;reversed applique D39:かたい材料
のアプリケ;変わりボタン D40:ふちかざり;フリンジ;レース飾り D41:特殊加工糸;
金銀糸;太さの均一でない糸;つむぎ D42:コーティング;箔;糊つけ D43:よごれ;変退
色;汗じみ D44:いたみ;補修ずみ D51:しわ D52:折り目;平面的プリーツ D53:布の
のび;ちぢみ;いせ;くせづけ D55:起毛 D56:文様名 D60:技法名

- ・ 構造技術に以下の すべて いずれか の語あるいはコードを含む
 - F12:ウエストゾーンに切りかえがある F20:股または袖付けに襷を用いている
 - F32:ミシンで縫った箇所がある F47:袖がついている F48:股または袖付けに曲線裁ちの部分がある F49:バスト、ヒップ、肩胛骨にむかうダーツがある F50:特定部分以外にあき、切れ目がある F59:肩傾斜がある F63:ウエストゾーンにギャザー等がある F75:上半身着または全身着の身頃がうちあわせ F76:固定的な留め具をもつ F77:非固定的な留め具をもつ;ひも;おび F79:左右が非対称である
- ・ 身装概念コードに以下の すべて いずれか のコードを含む
- ・ 身装概念に以下の すべて いずれか の語を含む
- ・ 備考に以下の すべて いずれか の語を含む

2) システム開発

このデジタル・アーカイブは、国立民族学博物館久保研究室と大阪樟蔭女子大学高橋研究室が共同で作成したものである。データ分析及び構造設計はMCDプロジェクトが行ったこのデジタル・アーカイブは、平成16年度・17年度・18年度の独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金 - 研究成果公開促進費（データベース）によったものである。

「みんぱく」収蔵庫に収蔵されているアクセサリ標本資料の詳細分析情報 5,293 件、及び画像情報 5,567 件（22,865 枚）そのほかに関連情報を収録している。アクセサリの範囲は、履物、被り物、ベルト、ブローチ、腕輪などの副装品、ボタンなどの衣服の付属品、かばん、喫煙具、傘、刀剣類などの持ち物を含めている。収録されているアクセサリ標本資料に衣服標本資料とのセットものがある場合は、関連情報として服装・身装文化（コスチューム）データベースとリンクを図っている。関連する文献書誌情報・文書画像についても、著作権の処理が済み次第、順次リンクを図っていく。

現時点（2007年3月現在）ではアジア、中東、ヨーロッパ、アフリカの標本資料を対象とし、一部、北米、南米、オセアニアを含む。使用地、現地名、布地特性、構造技術、身装概念などの項目で検索できる。プルダウンメニューを使って検索のためのことばを指定できる項目もある。

ヒアリング個表（２）

地場産センター、公設試 関係

- ・ 福井県工業技術センター
- ・ 石川県工業試験場
- ・ (株)繊維リソースいしかわ
- ・ (財)一宮地場産業ファッションデザインセンター（FDC）
- ・ 桐生地域地場産業振興センター

福井県工業技術センター

所在地	〒910-0102 福井県福井市川合鷲塚 61 字北稲田 10
電話	0776-55-0664
設立	1902 年、福井県工業試験場として設立
サンプル保管開始年	大正 4 年から試織のサンプルを保管開始
資料整理スタッフ	化学繊維部で管理しているが、特定者は無し
保管点数	約 1 万点
ヒアリング担当者	吉田徳寧（化学繊維部長）、勝木一雄（産学官共同研究グループ長）

1. 資料・サンプルの継続保管を始めた経緯

明治 35 年に設立され、羽二重織物の技術指導を開始、昭和 60 年に福井県工業技術センターに改組された。大正 4 年に米沢人絹糸製造所でレーヨン糸の生産が始まると同時に、レーヨン糸を用いた人絹織物を試織、その時以来、同工業試験場では開発された試織サンプルを保管している。

2. 特徴的なこと

福井県工業技術センターは、技術開発研究、分析試験、技術指導、技術普及、技術研修等を業務としており、テキスタイルサンプルを幅広く収集して、繊維業界の商品開発に役立てるといふ事業には、全く予算を付けていない。

福井県は、基本的に常に新しい物を求める県民気質であり、他方、石川県は文化を大切にし、伝統的なものをきちんと残す風土がある。福井産地は、個々の工場では自社の伝統技術を残すためにサンプルを保存し、商品開発、ビジネスに活用しているが、産地全体の取り組みのサンプル集積となると、他人の過去のサンプルは商品開発に役に立つ割合が低いとの意識が強く、産地内のサンプルの集積に関心を払ってこなかった。

これは、昭和 60 年前後まで量産定番産地として発展してきたために、産地内サンプル、国内サンプルに関心が無く、商売に直結する最新の西欧のサンプルに関心を寄せてきたことによる。また、2000（平成 12）年以降は、産業資材等の非衣料分野への転換、高機能テキスタイルの開発が産地戦略となり、産地の関心は高度技術の研究開発に向かっている。但し、業界内に、産地の技術伝承と繊維文化を後世に伝える施設を設けるべきとの意見がある。

3. 保管資料サンプルの内容・構成

収蔵テキスタイルサンプルは、約 1 万点であり、県工業技術センターの試作サンプルが 20%、購入サンプルが 40%、業界等の外部寄贈が 40%である。保管サンプルは、長繊維織物、ニットが主体になっているが、購入サンプル及び業界より寄贈のサンプルには短繊維織物・ニット生地が含まれている。

同センターの試作サンプルは、大正 4 年以降、現在までの約 2,000 点を保管、全国工業試験場のテキスタイルサンプル帳は、戦後 58 年間購入、約 4,000 点のサンプルが添付されている。また、同センターが分析した織物サンプル（福井繊維情報社が「織物サンプル情報」として昭和 30～57 年に配布）約 1,500 点あり、業界の寄贈サンプルは、フクイ・ファッション・クリエートセンター（福井県繊維産業基金協会）より寄贈の約 1,500 点、福井県繊維協会が国内及び海外で展示会を開催した時のサンプル約 1,000 点が保管されている。

4. 入手・保管の基準・方法

同センターが保管するテキスタイルサンプルの基準は、技術研究の観点に立っての保管を基準としている。同センターが独自に開発した試織サンプルは、時系列的に保管しており、技術研究にからむテキスタイルサンプルは購入しているが、特別予算は無く、必要に応じて購入している。また、産地業界団体から寄贈されたテキスタイルサンプルは、各時代の技術開発動向を反映するものであり、大切に整理保管している。

5. 保存の形態

保存スペースは 48 m²で、棚を中心とした保管を行っている。サンプルの分類方式は、年度別の分類であり、商品分類、糸別分類等は行っていない。

同センターの試織サンプル 2,000 点は、大正 4 年～昭和 30 年までサンプル帳にして、箱に入れて保管。それ以降のサンプルは、使用するために常時活用できる状態のサンプル帳にして設計書を添付して、棚に保管している。

全国工業試験場のテキスタイルサンプル帳（戦後 58 年分 = 4,000 点）は、棚に保管している。

福井繊維情報社の「織物サンプル情報」1,500 点は、人絹織物時代から合織織物時代へ転換する時の貴重なサンプルであり、設計書を添付して台紙にして棚に保管。

業界寄贈サンプル 1,500 点は、ハンガーサンプルにして保管。

6. 利用活用の状況

サンプルの利用に人数は、年間 150～200 人と少ない。利用の目的は、サンプルの設計書など技術的視点での利用となっている。

7. デジタル化への取り組み

保管サンプルのリストのデジタル化は行っていない。サンプルを技術的に利用する場合は、時代別のファイルが最適であり、今後もデジタル化する計画は無い。

8. デジタル情報の提供方法

同センターは、昭和 58 年に通産省の補助金「地域システム技術開発補助金」を受けて、

「繊維データベース」を作った。この繊維データベースは、福井産地の織物の中心がドビー織のために、1,500種のドビー組織の分解設計データを入力し、フロピー化して織物工場へ提供した。織物工場が商品開発する場合、複雑なドビー組織を開発するには労力と時間がかかり、基本の織組織が電子化されていれば、それを基にバリエーションによって開発ができ、現在も活用されている。この1,500種の基本ドビー組織は、福井県繊維技術協会が1994～1996年に3分冊の本にして発行している。

9. デジタルの利用状況

10. 保管に関する問題点

11. 他社・他機関への公会・開示

12. 維持運営の問題点

13. 他社とのネットワーク

工業技術センターは公的機関であり、利用要望者には常に公開している。その他の項目については、特に無し。

14. 繊維及び服飾ファッション資料の散逸状況への見解

工業技術センターの役割は、テキスタイルの新技术の開発、テキスタイルの風合、力学的特性の研究と、業界への技術支援、産・学・官共同研究等の技術分野が業務内容となっている。テキスタイルサンプルの散逸・保存問題は、しかるべき機関において考えるべきである。

15. 統括機関（設立された場合）への資料提供

保管サンプルは、技術面で重要なものであり、提供できない。

16. 今後の計画

17. 他社の繊維及び服飾ファッション資料に関する公開・開示の要望

特に無し。

石川県工業試験場

所在地	〒920-8203 石川県金沢市鞍月 2 丁目 1 番地
電話	0772-67-8090
設立	明治 9 (1876) 年に石川県勸業試験上として発足、大正 7 (1918) 年に石川県工業試験場を設立
サンプル保管開始年	昭和 50 年代から本格的に開始
資料整理スタッフ	繊維生活部で管理しているが、特定者は無し
保管点数	約 8,000 点
ヒアリング担当者	山本 孝 (繊維生活部長)

1. 資料・サンプルの継続保管を始めた経緯

石川県工業試験場は昭和 56 年に「テキスタイルデータバンク整備事業」を立ち上げ、国内外からテキスタイルサンプルを収集、産地企業の商品開発強化支援の事業をスタートさせた。昭和 58 年にはフランスからオールド・コレクションを購入、テキスタイルサンプルの収集蓄積を推進したが、平成 2 年 6 月に「繊維ソースいしかわ」が設立されたのを機会に、それまで収集してきた貴重なサンプルをセレクトして、いしかわりソースへ貸与した。それ以後、同工業試験場は試織サンプルの保管を継続しているが、テキスタイルサンプルの収集は一部の技術的サンプルを除いてほとんど行っていない。

2. 特徴的なこと

地方の公設試験場が、産地企業のテキスタイル開発のアイデアソースとして、県費を支出して 1800 年代のフランスリヨン地方やヨーロッパ各地の貴重なサンプル(現在では入手不可能なサンプルもあり、国内有数のコレクション)を収集したことは、極めてまれなケースである。

財政的に余裕の無い産地組合が、世界有数のテキスタイルサンプルを収集し、収集サンプルを一点毎に解析(分解設計)することは、人的な面でも極めて困難である。そうした中で、地方の公的機関がテキスタイルサンプルの蓄積に積極的に動いたことは注目されるべきことである。

3. 保管資料サンプルの内容・構成

4. 入手・保管の基準・方法

同試験場は、「テキスタイルデータバンク整備事業」を昭和 56 年から平成元年まで 8 年間、国内外の織物サンプル約 30,000 点を収録した。この中で特筆すべきものは、オールド・コレクション(1869 年～1956 年にフランスを中心するヨーロッパ各地の織物を品種別にコレクションされたサンプル帳) 全 17 冊、8,145 点である。「テキスタイルデータバンク整

備事業」は、同試験場の主任研究員が、フランスリヨンのシルク博物館を視察調査し、これを参考に推進したものである。オールド・コレクションは、1冊数10~100万円する高価なものである。

同試験場が昭和63年に発行した「テキスタイルデータバンク、オールド・コレクション特集」の冊子の中で、「織物は芸術であり、織技術や織物組織が、いかに完成し、優れたものであっても、時代に対応したデザインや新しい色彩を取り入れていかなかったら、人々の心を打つものとならない」と述べているが、これが同試験場のテキスタイルデータバンク整備事業の理念であった。

5. 保存の形態

テキスタイルデータバンク整備事業は、前述のごとく平成2年から「繊維リソースいしかわ」に引き継がれ、2万点を超えるテキスタイルサンプルは「繊維リソースいしかわ」へ貸与され、現在、同試験場に残されているサンプルは約8,000点である。海外から収集したサンプル帳を中心に約7,000点がブック形式で書庫に保管されており、昭和56年~平成3年までの石川産地織物のサンプル1,000点が棚に保管されている。

6. 利用活用の状況

主力サンプルを「繊維リソースいしかわ」へ移しているため、サンプルの利用は同試験場職員が主体となっており、外部の利用は少ない。

7. デジタル化への取り組み

8. デジタル情報の提供方法

9. デジタルの利用状況

10 保管に関する問題点

「繊維リソースいしかわ」で行っており、同試験場としては特別のコメントなし。

11. 他社・他機関への公会・開示

公的機関であるので、収集サンプルは公開している。

12. 他社・他機関とのネットワーク

テキスタイルサンプルのデータベース化は、「繊維リソースいしかわ」が先行して行っており、今後は全国主要産地にサテライトを設けて、統一したシステムで連携すべきである。テキスタイルサンプルのデータベースソフトを作るには、かなりの資金がかかるので、国の支援で構築した「繊維リソースいしかわ」のシステムを活用したらよいと思われる。

13. 維持運営の問題点、

繊維アーカイブ事業は、単なるテキスタイルサンプルを集めただけでは利用効果が低い。織物組織等の解析資料の添付が必要とされ、その運営には多額の資金が必要とされる。フランスリヨンのシルク博物館は、収蔵品を見るための会員制度によって資金を集めており、また美術館として観光収入もある。この2つが揃わないと運営は難しいと考えられる。

また、収集・蓄積したサンプルを産地企業が活用するかどうかは、産地の生産品種の変化に蓄積されているサンプルが対応できるかどうかに関係がある。石川県には、小松にジャカード産地があり、昭和50年代にはプリント加工の比率が高く、柄に関するニーズが高かく、柄を中心としたサンプルが多く収集されてきた。しかし、1990年代になるとプリントの加工比率が大幅に下がり、無地中心の高機能テキスタイルの開発が進み、2000年以降、この動きがさらに加速し、柄のテキスタイルサンプルの利用率が落ちることになる。

サンプルの収集は重要と言われるが、実際は費用対効果の問題が浮上して、資金確保が難しくなる。この事業は、美術館のようなところでやらないと長続きしない。

14．繊維及び服飾ファッション資料の散逸状況への見解

テキスタイルサンプルは、産元商社・大手工場でかなり保有しており、廃棄処分等が行われる時は、企業に御願ひして収集すべきである。但し、何でもかんでも残すというのではなく、美術品としてのコンセプトと、技術面から貴重と考えられるものを、収集機関においてセレクトして残すべきである。

15．統括機関（設立された場合）への資料提供

保管サンプルは、提供できない。

16．今後の計画

17．他社の繊維及び服飾ファッション資料に関する公開・開示の要望

特に無し。

(株)繊維ソソースいしかわ

所在地	〒920-8203 石川県金沢市鞍月2丁目20番地
電話	0772-68-8115
設立	平成2年6月に設立
サンプル保管開始年	平成2年から開始
資料整理スタッフ	職員が兼務で対応
保管点数	約32,000点
ヒアリング担当者	下倉正光(参事)

1. 資料・サンプルの継続保管を始めた経緯

政府のリソースセンター構想に基づいて、平成2年6月に「繊維リソースいしかわ」が設立された。国のリソース・ビジョンは、商品開発支援のためのテキスタイルサンプルの集積、QR等の情報化の推進、人材養成の強化、展示会の開催等によるビジネス促進を打ち出し、「繊維リソースいしかわ」は、国の構想を着実に実施して来ている。

テキスタイルサンプルの収集・蓄積・解析をメイン事業の一つとして位置付け、石川工業試験場からオールド・コレクション等の貴重なサンプルを借り受け、独自のテキスタイルサンプル収集・蓄積とデータベース化の事業を展開している。

2. 特徴的なこと

「繊維リソースいしかわ」のサンプル収集・蓄積事業は、石川県工業試験場との官・民が一体となった集積・解析を行っているところに特徴がある。特に、1800年代のフランスリヨン地方やヨーロッパ各地の貴重なサンプル、1900年代半ばの天然繊維から化合繊維へ移行変わる時代のヨーロッパのサンプル、国内の重要サンプル、石川産地の代表的サンプル等を蓄積しており、文字通り北陸を代表するテキスタイルのデータ・バンクである。

3. 保管資料サンプルの内容・構成

4. 入手・保管の基準・方法

同リソースの保管サンプルの内容・構成及び収集の方法は以下の通りである。

オールド・コレクション

石川県工業試験場が、収集したフランスを中心としたヨーロッパ各地の1869～1955年のテキスタイルサンプルで、5年毎の契約更新で借受ている(点数は11,160点)。

オールド・コレクション「スタロン」

フランスリヨンのスタロン社が収集したサンプルで、このサンプルは、昭和30～40年にヨーロッパで作られたテキスタイルサンプルである(点数は10,313点)。天然繊維から化合繊維に移り変わる時代の貴重なサンプルであり、約300万円で購入し、同リソ

ースが整理・分類してブック・カードにして保管している。主要サンプルには、織物組織図が添付されている。

オールド・コレクション「いしかわ」

昭和 29～44 年の人絹織物から合織織物に移る時代の石川県内の産元商社・織物工場で作られた織物サンプルのスワッチボードである（点数は 1,200 点）。

オールド・コレクション「友禅模様裂」

石川県の代表的な伝統工芸「加賀友禅」の昭和 29 年～45 年に作成された 285 点のスワッチボードである。

東京プレテックス・コレクション

国内で最も重要な素材展であった東京プレテックスに出品されたテキスタイルのサンプルで、昭和 57 年～平成 6 年までの 14 年間の SS、AW のサンプル 7,146 点（ブック帳 20 冊）が収録されている。

石川産地の展示会サンプル

昭和 54 年～現在までの国内外の展示会に出品した展示品のサンプル 2,000 点で、ハンガーで保管している。

5. 保存の形態

保管方法は、ハンガーが 6%、その他はブック管理であり、約 70%がデータベースで映像化している。ハンガーサンプルは電動ラックで保管している。

6. 利用活用の状況と問題点

当初は、月 100 人を超える産地業者が商品開発のために訪れたが、今は大幅に減少して月 4～5 人の利用者となっている。

利用者の減少の要因は、石川産地の織物生産量に占めるプリント織物、ジャカード織物の縮小、ファッションテキスタイルの生産減少と高機能テキスタイルの生産増加によるものである。現在利用している業者はカーテン等のインテリア関係者が多い。

7. デジタル化への取り組み

8. デジタル情報の提供方法

9. デジタルの利用状況

収集・蓄積されている 32,000 点のサンプルの内、7 割の 20,000 点のサンプルはデータベース化され、映像提供されている。

デジタル情報の提供として、ホームページ（<http://www.ita.or.jp>）のタフリックライブラリー（Textile And Fashion Resource Ishikawa LAIBRARY）で、年代別、素材別、加工別、組織別、柄別などの条件設定で、誰でも簡単に画像検索ができる。

10．保管に関する問題点、

保管スペースは、電動ラックの導入によって確保できており、ここ当分は保管スペースの心配はない。但し、1800年代のフランスのオールド・コレクションは、ブック帳の疲労度が進んでおり、保管に細心の注意を払っている。

11．他社・他機関への公会・開示

収集・保存サンプルの7割がホームページで誰でも見ることができ、現物を見るために同リソースを訪れる人には、すべてのサンプルを公開している。

12．維持運営の問題点、

サンプルの収集・解析を継続していくには、それなりの資金が必要であり、繊維企業の利用度が落ちてくると費用対効果が問題になる。サンプルは集めればよいといった問題では無く、解析作業とデータベースへの入力作業のコストを考えると、収集・保管・解析の継続には、点数がある程度限定されたものになる。

13．他機関とのネットワーク

全国のサンプル収集機関とシステムの連携ができれば、繊維企業の活用が相当伸びると考えられる。

14．繊維及び服飾ファッション資料の散逸状況への見解

上述のように、テキスタイルサンプルを産地企業から大量に寄贈されても、サンプルの整理、解析、データベースの入力に相当のコストがかかり、その資金をどうするのか、費用対効果の問題の壁が厚いのが現状である。

15．統括機関（設立された場合）への資料提供

保管サンプルは、提供できない。

16．今後の計画

17．他社の繊維及び服飾ファッション資料に関する公開・開示の要望

特に無し。

財団法人一宮地場産業ファッションデザインセンター（略称：FDC）

所在地	〒491-0931 愛知県一宮市大和町馬引字南正亀 4-1
電話	0586-46-1361 FAX0586-44-7455
設立	1984年開設
運営規模	年間3億円
スタッフ	8人（FDC全体+アルバイト）
保管点数	3万点（現物資料）
ヒアリング担当者	早田常夫（プロダクトマネジャー）

1. 設立の経緯

同センターは、尾張西部地域の地場産業振興をはかるため、1984年2月に開設された。開設にあたっては、国・愛知県・一宮市をはじめとする地域24市町村や18業界団体が協力した。

場所は、尾張西部地域の中心部に位置し、愛知県産業技術研究所尾張繊維技術センターとも隣接し、事業も両機関が各々の機能を補完し、有機的連携を持って活動している。

開設以来20年間、情報の収集・提供、新商品開発、人材養成などの振興事業などの活動を行い、とくにファッション情報の収集・提供事業などに注力している。

しかし、国際化や情報化の進展によって同地域を取り巻く環境が変貌し、地域の産業、企業の抱える課題が変容したため、20周年を期に2003年から事業内容を大きく転換。「チェンジ チャレンジ New FDC」を合言葉に「顧客の創造」をテーマにファッション事業、「地域を再興」を目指す地域おこし事業を展開している。

【出捐団体】

- ・愛知県
- ・尾張西部地域16市町村
 - 一宮市、津島市、犬山市、江南市、稲沢市、岩倉市、愛西市、弥富市、大口町、扶桑町、七宝町、美和町、甚目寺町、大治町、蟹江町、飛島村
- ・業界18団体
 - 一宮商工会議所、尾西毛織工業協同組合、尾北毛織工業協同組合、津島毛織工業協同組合、名古屋毛織工業協同組合、尾州織物工業協同組合、尾北織物工業協同組合、尾州絹化織物協同組合、尾西染色工業協同組合、愛知毛織物整理協同組合、協同組合一宮繊維卸センター、一宮縫製工場団地協同組合、愛知県撚糸工業組合、一宮織物修整協同組合、津島織物修整協同組合、木曾川織物修整協同組合、社団法人尾西化合織貿易振興会

2. 特徴的なこと

同センターは、尾州産地のリソースセンターとして機能しており、そこでのアーカイブは産業振興を目的にしたもので、学術を目的にした美術館、博物館とは性格を異にしている。このため、収集されているアーカイブは、商品開発の支援を最優先に調達され、この結果、産地内の企業が製品化したサンプル等は少ない。その多くが、テキスタイル・コンサルタント会社との提携によって収集されてものになっている。

3. 保管資料サンプルの内容・構成

トレンド予測に基づき産地の関係企業の活性化に役立つテキスタイル及びアパレルを収集し、過去からのコレクションと共に展示している。また、内外のファッション雑誌、テキスタイル見本帳、関係図書、ファッション映像情報提供している。

【所蔵内容】

・トレンドテキスタイル（収集生地）

内容 独自の情報分析により、毎シーズンの FDC テキスタイルトレンドを打ち出し、そのトレンドに基づいて収集した生地

形状：ハンガー・パターンシート・画像（一部）

年代：1984年（'85春夏向け）～2003年（'04/'05秋冬向け）

各年 2シーズン 計 38シーズン

総点数：各シーズン 1,000点 計 38,000点

閲覧等：資料室の保管庫に、シーズン別・素材別にして保管。希望者には公開。

閲覧方法：現物閲覧は、図書情報加工室等で、手で触って確認することも可能。

・アパレル

毎シーズンの FDCトレンドに基づいて収集したアパレル

年代：1984年（'85春夏向け）～2003年（'04/'05秋冬向け）

各年 2シーズン 計 38シーズン

総点数：各シーズン 30点 計 1140点

閲覧方法：現物閲覧は、商品開発室で、手で触って確認することも可能。

・オールド・コレクション（スワッチブック）

スワッチブック

年代：『OLD COLLECTION』（1879～1919）合計 16冊

『OLD COLLECTION』（1960～1965）(EUROPE WOMEN'S)合計 7冊

『ITALTEX MAN/WOMENS』（1985～1995）合計 44冊

『TOKYO STOFF』（1976～1989）合計 27冊

- 『東京 PRE-TEX 』(1990~1994) 合計 10 冊
- 『Elegance PARIS 』(1987~1993) 合計 13 冊
- 『CLAN TARTANS OF SCOTLAND』 合計 3 冊
- 『FRANCITAL 』(1985)合計 1 冊
- 『TEXTURE (皆川魔鬼子テキスタイルデザイン集)』 合計 1 冊

総点数 122 冊

閲覧方法：現物閲覧

その他 141

【ファッション雑誌】

- ・ JJ (ジェイジェイ) 光文社 月刊
- ・ チャネラー (株)チャネラー 月刊
- ・ ファッション販売 (株)商業界 月刊
- ・ 流行通信 (株)インファス 月刊
- ・ メンズクラブ (株)アシェット婦人画報社 月刊
- ・ SPUR (シュプール) (株)集英社 月刊
- ・ 流行色 (社)日本流行色協会 季刊 うちトレンドカラー年 2 回
- ・ WWD ウィメンズ・ウェア・ディリー・ジャパン 週刊
- ・ international textile 隔月刊
- ・ international textile interior 年 3 回
- ・ Vogue (in Italy) 月刊 (Casa Vogue 含む)
- ・ Nelly Rodi(trend book) 仏・ネリーロディ社 年 2 回

【FDCライブラリー】

- ・ 蔵書数 合計 1,365 冊 (書籍 1,243 FDC オールド・コレクション 122 を除く)
- ・ 書籍名
CIM COLOR INFORMATION、TREND MANUAL/COLOR、メンズコレクション、オートクチュールコレクション、リヨン織物美術館、ミュルーズ染織美術館、イギリスの染織、日本の染織、日本染織芸術叢書、染織の美、日本の文様、ファッションの歴史、文化服装講座、衣料品ハンドブック、名物裂類集ほか
- ・ 書籍ジャンル別冊数
販売・経営・商品企画関係=67
服飾、意匠、織物・糸見本関係=561
技術関係=161
辞書・辞典=105
美術・工芸関係=330

4．資料サンプルの入手方法

開設当初からアーカイブは、国内のテキスタイルトレンドのコンサルタント会社にアウトソーシングし、そこで購入したものを集積してきた。その多くが有償による調達で、産地内企業のサンプル等は対象外となってきた。その理由は前述の通りである。収集資料（生地）は、シーズン毎に行われ、着分（1.5m）で 1,000 点の資料（うち海外資料 25%）を継続的に購入してきた。ここではテキスタイル資料が中心となるが、ファッショントレンドに即したアパレル資料も購入している。その購入先は小売店が主体となっていた。

しかし、2002 年からは調達方法を変え、現在はフランスのファッションコンサルタントの Nelly Rodi 社と業務提携を交わし、同社の分析によるサンプルをシーズン毎に 100 点購入している。これは、テキスタイル情報の精密性を高めるのが目的で、シーズン毎に贈られてくるサンプルは、プルミエール・ヴィジョンなどで発表されるのと同じタイミングで商品化されたものである。

さらに Nelly Rodi 社との契約では、シーズン毎の 100 点あまりのサンプルのほか、同社が行ったトレンド分析（テキスタイル、アパレルとも 4 つのテーマ別に作成）の情報ブックの提供と、同社スタッフによるセミナーが開かれている。ちなみにこれに伴う費用は、年間 1,200 万円である。

5．施設の形態

同センターの来場者で最も多いのが、毎年 5 月と 11 月に開催される「尾州テキスタイル・エキジビション」で、会期中に 1,000 人が訪れる。しかし、アーカイブに関連する施設は、同センターの 3 階を使用しており、資料室、図書・情報加工室、商品開発室で構成されている。資料は、着分（1.5m）、ハンガー（35 cm × 35 cm）、ファイル（15 cm × 10 cm）の 3 つによる形態で保管されている。ただ、着分の資料については保管スペースが逼迫するため、10 年を経過したものは、定期的に「収蔵展」を開き、来場者に切り分け提供（無料）している。

また、1 階の常設展示場では、産地企業の新製品（テキスタイル、ヤーン、インテリアなど 100 点余り）をシーズン毎に展示している。

6．利用の状況

アーカイブに関する利用は少ない。その理由は、資料に添付する技術データが脆弱なためである。収蔵資料の多くは、生地小売店や海外で調達されているため、技術分析（組成などの分析）に多額の費用がかかる。そのためファイル保管されている 3 万点の資料は、資料内容を示すテキストがなく、テキスタイルに精通した技術者が同伴しないと情

報収集が難しい。このことがデジタル化への障害にもなっている。

ただ、Nelly Rodi 社の情報提供にあたっては、「ユーロ・テキスタイル・プロジェクトチーム」という会員組織を設けており、年間 10 万円の会費を払った会員が 21 社にのぼり、Nelly Rodi 社のトレンド情報をもとに商品開発を行い、毎シーズン、東京・青山のベルコモンズで「ジョイント尾州 (JB)」を開催している。

【ユーロ・テキスタイルのセミナー--2007 年 5 月開催】

・実践セミナー : 4 つのテーマごとに素材トレンド情報をより理解するために、素材スワッチをパネルで展示、その選ばれた理由を詳しく説明。(会員限定)

・実践セミナー : 2008/09 AW ファッショントレンド情報。世界のファッショントレンドを的確に把握、分析し、4 つのテーマに分類した素材トレンド情報を説明。

・トレンドパネル展 (一般公開)

・実践セミナー : ジェネラルトレンドの解説。2008/09AW トレンド情報を踏まえ、自社の特長を活かした企画についての考え方を各社発表。

・実践セミナー : オリジナル素材開発 (2008/09AW) の具体的アドバイス。

・実践セミナー : オリジナル素材 (東京展向け秋冬開発素材) の進行状況の確認。

7 . デジタル化への取り組み

かつてテキスタイル資料のデジタル化を手掛けたことがある。収蔵資料の中から 100 点を選び、デジタル化に着手したが、システム設計をはじめ生地データの作成、撮影などに多額の費用がかかるため、現在は中断したままである。システム設計を除く費用だけでも、生地分析やデータ入力に 1 点当たり 2 万円を要するため、すべてをデジタル化すると約 6 億円を要することになる。

8 . 運営に関する問題点

前述の「ユーロ・テキスタイル・プロジェクトチーム」を除くと、同センターが保管するアーカイブの利用は限られ、その有効活用が大きな課題となっている。その背景には、資料に関する内容説明 (テキスト) が整備されていないこともあるが、それとともに要因の多くを占めるのが「産地メーカーの多くがオリジナル開発に消極的なことが利用頻度を減らしている」ということである。これは産地メーカー自体が逡巡していることも原因のひとつである。

財団法人桐生地域地場産業振興センター

所在地	〒376-0024 群馬県桐生市織姫町2番5号
電話	0277-46-1011
設立	昭和60年10月 財団設立 竣工 昭和62年3月
運営規模	15,615,600円(平成19年度収支予算額)
スタッフ	常勤役員1名、事務局職員8名、契約職員 4名
保管点数	24,400点
ヒアリング担当者	生方修一(事務局長)

1. 保管資料サンプルの内容・構成

桐生市染織資料・民族衣裳は、世界的にも貴重な資料として地場産センター開設と同時に桐生市と使用貸借契約を締結し、地場産センターで保管管理し、定期的に展示公開し、多くの市民の方々と感動を共有している。収集の背景は、1981年8月に開催された「民族衣裳と染織展」が契機となった。この染織展は、桐生市の内外に大きな反響を呼び、このとき、志を同じくする人たちが桐生染織研究会を発足させた。民族衣裳と染織関係の資料が、これからの桐生にはどうしても必要であり、そのため調査・研究・収集をする機関がなければならぬと思ったからである。

1) 世界の染織資料(世界の民族衣裳)コレクション

2) 桐生市織物産業資料

- ・桐生市織物資料
- ・亀倉雄策資料
- ・桐生ロータリー寄贈中国少数民族衣裳
- ・岩下コレクション(道具類)
- ・桐生市織物資料(道具類)
- ・群馬大学記念館物品
- ・桐生市織物資料(書籍)
- ・桐生織物産地見本(リスト無し・WEB検索)

現在の収蔵数 合計 1,913点(所有者は桐生市)

【地域別内訳】

- | | |
|------------------------|------|
| ・日本 | 189点 |
| ・中国、台湾、韓国等の東アジア | 281点 |
| ・インドネシア、フィリピン等の東南アジア | 191点 |
| ・インド、パキスタン、ブータン等の南アジア | 229点 |
| ・サウジアラビア、アフガニスタン等の西アジア | 231点 |
| ・ウズベキスタン等の中央アジア | 42点 |
| ・オセアニア | 18点 |

・欧州	156点
・アフリカ	63点
・北アメリカ	80点
・中南米	297点
・その他（原産地不明）	136点

【内容別内訳】

・桐生市染織資料「世界の民族衣裳コレクション」	1,913点	
		桐生地場産センター 収蔵室
・織物資料等	3,220点	
		桐生地場産センター 収蔵室
・中国少数民族衣裳「桐生ロータリークラブ寄贈」	51点	
		桐生地場産センター 収蔵室
・亀倉雄策コレクション「亀倉雄策氏寄贈」	24点	
		桐生地場産センター 収蔵室
・岩下コレクション「道具類」	16点	
		旧桐生織物専門学校 収蔵所
・桐生市織物産業資料保存委員会「道具類」	84点	
		旧桐生織物専門学校 収蔵所
・群馬大学記念館物品「標本等」	97点	
		桐生地場産センター 収蔵室
・繊維関係書籍	979点	
		桐生地場産センター 書庫
・桐生織物産地見本	16,000点	
		桐生地場産センター 収蔵室
・桐生織物産地試作見本	2,000点	
		桐生地場産センター 収蔵室

2. 資料サンプルの入手方法

収集には、多額の資金援助を受けた某氏、多年にわたる貴重なコレクションすべてを譲り受けた吉田巖氏、ブータンの染織のマーク・パーソロミュ氏、台湾・藩部の岡村吉右衛門氏、資料の鑑定や指導を受けた山辺知行氏・高田倭男氏・岩立広十郎氏等の協力があった。収蔵品の入手は、無償のものと有償のものがある。染織資料は繊維産業界のためだけのものではない。見る人たちに、生活文化とは、ハンドクラフトとは何かを呼びかけ、明日のまちづくりに、モノづくりに大きな役割を果たす、との考え方が運営の基本となっている。

4. 利用の状況

利用者数については、展示公開中は無人であり実数の把握は困難である。個人情報保護法のためか署名簿・アンケート記載者は皆無である。

- ・ 公開非公開の実態
すべての収蔵品は希望者に担当者が対応し、公開している。
- ・ 商品企画・クリエイション活動への活用のされ方
常設展示場で展示公開し、希望者には職員が対応し、該当製品を別途提示している。

5. デジタル化への取り組み

アーカイブのデジタル化が進めるのは、時代とともに劣化する所蔵品の保存・記録と教育・ビジネス用コンテンツ利用のため。同センターは、地域地場産業振興センターであるため、地域繊維業界の新商品開発デザインソースとしてヒントを提供すべくマルチメディア化を推進した。初期段階では「専用機による染織資料検索システム」、第2段階では「専用機によるハイビジョン対応染織資料検索システム」、第3段階では「染織資料検索 Web システム」を構築した。

初期段階では、地場産センターの専用機を作動させての検索だったが、その後インターネットでの検索と情報の表示と活用が可能になった。但し、サーバー構成(検索システム)・メンテナンス費用の問題から、平成19年度で公開を終結し、平成20年度からは展示ホール内で専用PCにて公開にしている。その内容は次の通り。

- ・ 桐生市染織資料「世界の民族衣裳コレクション」
- ・ 桐生織物産地見本(約10,000点)

地場産センターホームページ
<http://www.kiryujibasan.or.jp>

資料検索

キーを選択して検索に進む。

検索条件設定
柄・デザイン
製作年代
原産国
用途/目的
素材
技法

活用

染織資料検索ページ

桐生地域地場産業振興センター
染織資料検索 Web システム

検索条件設定 検索
条件に一致した資料が縮小イメージで表示される
イメージをクリックするとその資料の
イメージと文字情報が表示される。

検索結果
サムネール表示
イメージ
情報の表示

同センターのシステムでは、ユーザーの検索指示により、サーバー上に登録された画像データベース、文字情報データベースをもとに、表示するデータを動的に構築して閲

覧させることが特徴である。

6．キュレーターについて

学芸員資格を有するキュレーターの育成計画はない。催事の際には、市内に居住する学芸員資格を有するキュレーターと連携している。商品企画・開発に関する支援は職員が日常の業務の中で行っている。

7．アーカイブの散逸対策

桐生市の場合は「織物産業資料保存委員会」を組織して、情報収集・現場確認などを行っている。但し、問題点は、収蔵場所・収蔵品のメンテナンス（技術者）が不足することである。

8．統括機関（設立された場合）への資料提供

現在では産業振興センターに収蔵し、整理・保管・活用を行っているが、商品活用に必要として最優先に構築しているわけではない。将来に向けての資料保存と記録保存であり、しかるべき施設（博物館・資料館）ができれば移行されることが望ましい。その際は、当センターではデジタル化されたコンテンツを利用する。また、統括的な機関が設立されたときの公開については、HP 上でも公開しており、公開できるとしている。。

9．運営に関する問題点

利用度を上げる方策。しかし、公開のネックや問題点としては、すべて職員が立ち会って公開対応しており、専門の担当者があるわけではなく、職員が拘束されてしまう。さらに HP 上での公開については、「コンテンツ構築・システム運用費用の捻出」に問題がある。

ヒアリング個表（３）

産地企業 関係

- ・サカイオーベックス株式会社
- ・ケイテー株式会社
- ・松文産業株式会社
- ・株式会社カツクラ
- ・丸井織物株式会社
- ・稲山織物株式会社
- ・小林当織物株式会社
- ・熊澤商事株式会社

サカイオーベックス株式会社

所在地	〒918-8530 福井県福井市花堂中 2 - 15 - 1
電話	0776-36-5800
設立	昭和 9 年設立、明治 24 (1891) 年創業
資本金	46 億 5,504 万円
従業員	551 名
保管点数	
ヒアリング担当者	三田村庄一 (会長、日本染色協会会長、(社)福井県繊維協会会長)

1. ヒアリング者の特徴

福井県繊維協会会長である三田村会長は、繊維博物館の設立構想を打ち出し、新繊維ビジョンの基本政策小委員会委員として、繊維アーカイブ事業の推進について積極的に発言をしている。

2. 繊維アーカイブに対する考え方

- (1) 今回の経済産業省 (中小企業基盤整備機構) の委託を受けた東レ経営研究所の「テキスタイル、アパレル等のサンプル保存と活用に関する調査」は、サンプルの保存点数と活用の現状等の狭い考え方の調査になると、本当に必要な対策の方向が出てこない。各企業にとって、サンプル保存・活用は商品開発面では重要な手段であり、それぞれの企業が必要に応じて対応している。
- (2) しかし、産地あるいは国単位で考えると、サンプルの集積・活用をみの繊維アーカイブ対策を考えると、利用頻度の低さが問題になり、費用対効果の問題が出てきて、有効な活性化策にはならない。繊維業界が今求めているのは何か、業界人が見落としている重要なことはないか、そして日本の繊維産業の文化・技術を後世に残すには何をすれば良いかの総合的視点での対策が必要である。
- (3) 「繊維アーカイブ」構想の私案を述べると、
散逸しつつある日本の繊維産業の生きた歴史・文化 (テキスタイルサンプル、製品、設備等) の保存、
日本の繊維技術の伝承としてのセンター機能、
人材養成の場として活用 (現物に接した教育)
繊維企業の商品開発担当者、アパレルメーカー企画担当者、デザイナー、専門学校の生徒等による活用、
過去の製品のみならず未来に対するハイテク分野の展示によって、小学生、中学生の学びの場を提供、一般観光客にも広く公開し、それによって繊維産業のイメージアップを促進、

繊維業界の遺産を、小規模で分散保管すると利用度が低くなる。集積はパワーであり、業界関係者が活用したくなるような充実した内容と規模の大きさが必要、繊維技術の専門スタッフを置いて、大学の研究内容も紹介し、産学官の連携の場として機能を持つ、国内外からバイヤーが訪れるビジネス用の展示会の場を提供、等の考えが必要である。

- (4) 新繊維ビジョンでは、機能が低下している繊維団体の再編問題が指摘されているが、繊維アーカイブ構想を単なるテキスタイルサンプル集積というこじんまりとした話ではなくて、今後の繊維産業の活性化を推進するための新組織、業界組織の中核を作るという発想を持つべきである。

3. 具体的な方策

- (1) 日本のテキスタイル工業は、各産地の特性が明確であり、化合繊維長繊維テキスタイルの北陸、ウールテキスタイルの尾州、綿テキスタイルの東海、繊維ビジネスの中心の大阪・東京をそれぞれ拠点として、繊維アーカイブ事業を含む総合振興機関を設けるべきである。その場合、工場・従業員数が最も集積している地域、大学・公設試験場との産学官連携の最適な場所に設けるべきである。
- (2) 繊維アーカイブのテキスタイルサンプル保管・活用のみでは、行政、業界企業の資金面での支援を受けるのは難しい。福井県繊維協会は、素晴らしい繊維文化・技術資産を未来に残すために、前述のような繊維の歴史・文化遺産の保管、技術の伝承、商品開発・販売促進等のビジネス促進、人材養成・イメージアップ等の総合対策を有する機関（繊維博物館構想）を県当局に提案しているが、未だ理解が浸透していない。
- (3) 繊維企業は、厳しい情勢の中で何とかして生き残ろうと努力しているが、先人の貴重な遺産が残っている今こそ、テキスタイルサンプル、繊維技術関連資料・機材等の集積を行い、個々の企業では対応が困難な日本の繊維産業の資産を守るための中核機関（拠点）を整備すべきである。その場合、直ぐに資金確保問題が浮上するが、資金問題から入ると頓挫するので、5年、10年の具体的な長期ビジョンを策定し、一步一步地道に推し進めることが肝要である。貴重なサンプル、資料がどんどん散逸しており、簡易的な保管場所を確保して、直ぐにでも収集に乗り出すべきである。繊維企業は、本当に業界の存続・活性化に必要と判断すれば金は出すので、資金問題は後からついて来る問題と考え、早く具体的なビジョンを論議することが必要である。

ケイター株式会社

所在地	〒911-8510 福井県勝山市昭和町 1-10-18
電話	0779-88-1151
設立、資本金	明治 43 年創業、資本金 100,000 千円、従業員数 180 人
サンプル保管開始年	創業以来のサンプルを保存。
資料整理スタッフ	開発部門が担当、スタッフは特になし
保管点数	約 10,000 点
ヒアリング担当者	荒井由泰（社長）

1. 資料・サンプルの継続保管を始めた経緯

同社は、羽二重織物の製造でスタート、大正末期に人絹織物、戦中は落下傘を製造、戦後は合繊転換を行い、現在は高機能のポリエステル織物、複合繊維織物を製造している。同社は、歴史的なテキスタイルサンプル及び繊維機械（ボタン機、イザリ機）を特別展示の建物に保管、北陸産地では数少ない貴重な歴史的遺産を大切に保存している企業である。

2. 特徴的なこと

- (1) 同社は、WJ 織機、AJ 織機の高速革新織機を 250 台設置し、昭和 50 年代はじめからコンピュータによる工場の工程管理に力を入れ、撚糸設備と 2 ピック WJ 織機の連動による薄地合繊織物の開発を展開、新合繊ブーム後は高密度織物、薄地複合繊維織物に転換し、現在は世界トップクラスの高速ジェット織機による多品種小ロット生産（織機 1 台に 1 品種生産）を得意としている。主要生産分野は、高密度のウインタースポーツ、アウトドア、カジュアル、ファッション、産業資材等である。同社の特徴は、過去から一貫して合繊の薄地織物の開発に集中してきており、同社の保管する織物サンプルは日本の薄地合繊織物の高度製織技術の代表的サンプルと言える。
- (2) 同社は、東レ株式会社のチョップ・テキスタイルの生産比率が高率で、企画開発面では川下ユーザーとの連携に熱心であり、特に内外のスポーツアパレルメーカーの開発部門と密接にタイアップしている。開発力は内外から高く評価されており、世界のトップレベルのスポーツアパレル、アウトドア関連テキスタイルの小ロット高級織物を提供している。
- (3) 以上のような生産体制を推進していることから、商品開発の試織点数は相当多いが、サンプルの保存については、厳選主義を貫いており、試織サンプルの不要なものは、関係部署が相談して思い切って廃棄している。

3. 保管資料サンプルの内容・構成

同社の収蔵テキスタイルサンプルは、すべて染色加工後のサンプルで、約 10,000 点を年度別に分類整理している。

4. 入手・保管の基準・方法

同社のテキスタイルサンプルの保存方針は、技術・風合面で特徴のあるもの、各ユーザーに納品した売れ筋商品等の貴重なサンプルを、保存の基準にしている。類似品のサンプルは、極力廃棄しており、1~2年の単位でサンプルの廃棄を行っている。

オンリーワンの開発を行わないと、世界の厳しい目を持ったユーザーから相手にされなくなるため、自社独自商品の開発が不可欠であり、同業他社に如何に真似されないかが重要なポイントとなっている。こうした意味から、同業他社のサンプルを集積したテキスタイルサンプル・センターは、余り参考にならないと考える。スポーツ、アウトドア関連の織物は自社独自の技術力が物を言う世界であり、自社の蓄積したサンプルのみが宝である。多品種小ロットにはクイックな開発が必要であり、バイヤーのイメージに合うサンプルを速く選び出すには、厳選されたサンプルの管理が必要となっている。したがって、サンプルを購入することは少なく、参考に製品サンプルは購入することがある。

5. 保存の形態

保存サンプルは、すべてハンガーサンプルで、織組織・糸使い・加工方法等の設計書が添付されている。

6. 利用活用の状況

サンプルの活用方法として、アパレルメーカーの企画担当者が描いているイメージを現物で明らかにするために、保存サンプルを提示している。基礎的な開発は、9カ月前から行い、具体的な開発はシーズンの6カ月前となっているが、期近対応の進展によって、期間が徐々に少なくなっている。クイックの開発のためには、過去のサンプルの設計書が役に立つことが多い。

7. デジタル化への取り組み

保管サンプルのリストは、コンピュータでデータベース化し、糸使い、織組織、加工等の各種の条件で検索できるようになっている。

8. デジタル情報の提供方法

9. デジタルの利用状況

10. 保管に関する問題点、

特になし。

11. 他社・他機関への公会・開示

12. 維持運営の問題点

13. 他社とのネットワーク

特になし。

14．繊維及び服飾ファッション資料の散逸状況への見解

テキスタイルサンプルが散逸の危機にあるので、我が国繊維産業の技術の結晶であるテキスタイルサンプルを特定の機関を設けて、全国レベルで保存するという事は、技術の伝承なり、テキスタイルの勉強する若いデザイナーや学生用の利用に供するという事になれば、それなりに意味があると思う。しかし、ビジネスに役立つかとなると問題で、過去のサンプルに使用されている糸はほとんどが無くなってるので、サンプル・センターは意味が無く、利用者が少ないのではないか。

15．統括機関（設立された場合）への資料提供

廃棄するサンプルは、ほとんど焼却処分している。テキスタイルサンプルには技術ノウハウが入っており、有料であっても提供はできない。

16．今後の計画

17．他社の繊維及び服飾ファッション資料に関する公開・開示の要望

テキスタイルサンプルは、パイヤー関係者なら見せるが、一般には公開しない。但し、若手のデザイナー、学生等のテキスタイルを学ぶ人にはケースバイケースで対応を考える。

松文産業株式会社

所在地	〒911-8531 福井県勝山市旭町 1-1-58
電話	0779-88-1137
設立、資本金	明治 33 年創業、資本金 250,000 千円、従業員数 480 人
サンプル保管開始年	創業以来のサンプルを保存。
資料整理スタッフ	開発部門部門が担当
保管点数	約 20,000 点
ヒアリング担当者	小泉新太郎（社長）

1. 資料・サンプルの継続保管を始めた経緯

同社は、戦前から北陸を代表する大手織布工場の一つで、昭和 30 年以降の重要な合繊織物のサンプルは保存している。

2. 特徴的なこと

(1) 同社は、福井県勝山市の本社工場（織布）、山形県の鶴岡工場（織布）、滋賀県の栗東工場（糸加工）を有し、革新織機の保有台数は 480 台、そのうちレピア織機は 378 台で、我が国化合繊長繊維織物業界の中で最大規模のレピア工場である。同社は、戦前、「マツブシルク」のブランドで広く海外で評判を得、戦後は合繊織物に転換し、ストレッチ性のあるポリエステル加工系織物の製織を我が国で最初に成功、以降、豊富な撚糸機等の準備機を駆使してファッション衣料用の厚織物分野の専門メーカーとして発展、合繊厚地織物分野では新潟の鈴倉織物と共に、日本を代表する企業である。

現在、同社は東レ、帝人、クラレ、ユニチカ、商社等と取引しており、レディース・ブラックフォーマルの国内生産の過半以上を供給、カジュアル用の中肉タイプの複合繊維織物、ユニフォームあるいは車両資材等の非衣料分野の織物を生産している。

(2) 以上のような織物の製造経過から、同社には日本を代表する厚地のファッション合繊長繊維織物のサンプルが多数保存されており、特に撚糸機、合燃機、複合仮扱機等を駆使した技術集約度の高い加工系を用い、レピア織機の高度技術で製織された織物サンプルは貴重である。

3. 保管資料サンプルの内容・構成

同社のテキスタイルサンプルの保管数は、厚地・中肉織物を中心にファッションテキスタイル、ブラックフォーマル等、約 20,000 点のサンプルを保管している。

4. 入手・保管の基準・方法

同社のテキスタイルサンプルは、100%自社で開発したものである。サンプルの保存方針は、試織のサンプルはすべてを 10 年間保管し、選別して廃棄している。販売ルートに乗った織物のサンプルは、原則としてすべて保管している。試織サンプル及びビジネスルートに乗

ったサンプルは、すべて設計書が添えられている。サンプルの保管・整理・維持に年間 300 万円の経費がかかっている。

5. 保存の形態

保存サンプルは、すべて染色加工後のハンガーサンプルを主体としており、その他原反、台紙管理のものもある。商談に活用できるように、直ぐに手に取れる状態で陳列保管している。

6. 利用活用の状況

バイヤーとの商談での活用が 50%、自社の商品開発に利用するのが 50%である。

7. デジタル化への取り組み

実施していない。ハンガーサンプルを年代別、用途別等に分類し、サンプルに品番、糸使い、加工場名、目付け、加工性量等のビジネスに必要なすべての情報を貼り付けている。バイヤーは、実物のサンプルを触りながらチョイスしており、今のところデジタル検索を作ることは計画していない。

8. デジタル情報の提供方法

9. デジタルの利用状況

特になし。

10. 保管に関する問題点、

特になし。

11. 他社・他機関への公会・開示

バイヤー以外の公開は、企業秘密があるのでできない。

12. 維持運営の問題点

13. 他社とのネットワーク

特になし。

14. 繊維及び服飾ファッション資料の散逸状況への見解

特になし。

15. 統括機関（設立された場合）への資料提供

テキスタイルサンプルには、当社の技術情報が盛り込まれており、外部には提供できない。

16．今後の計画

17．他社の繊維及び服飾ファッション資料に関する公開・開示の要望

特になし。

株式会社カツクラ

所在地	〒918-8034 福井県福井市南居町 81-1-35
電話	0776-33-8580
設立、資本金	大正9年創業、資本金 70,000 千円、従業員数 99 人
サンプル保管開始年	創業以来のサンプルを保存。
資料整理スタッフ	開発部門・営業部門が担当
保管点数	約 10,000 点
ヒアリング担当者	勝倉雅己（社長）

1. 資料・サンプルの継続保管を始めた経緯

同社は、日本で最も早くナイロン織物の製品化に成功した織布工場で、自社で生産して来た合繊織物のサンプルを保存している。

2. 特徴的なこと

- (1) 同社は AJ 織機、レピア織機 150 台を設置し、国内ではドビーカーテン、ロールカーテンのトップレベルの開発企業で、サンゲツ等の大手インテリア問屋へ販売しており、レディースのファッションテキスタイルは、東レのチョップ生産を行っている。北陸産地織布工場の中では、代表的な自販推進企業であり、その開発力は内外から注目されている。近年、同社営業部門はヨーロッパ、中国、米国等へのグローバルなカーテンの販売に努力しており、また同社のロールカーテンは日本市場の 5 割を越えるマーケットシェアを持っている。
- (2) 同社はカーテン用生地の開発・生産をメインとしているが、ファッションテキスタイルも合繊メーカー・商社の OEM 生産をしている。同社の開発商品で、インテリア問屋に採用された織物は、ブック帳に掲載されて全国の工務店や小売店に配布されている。生産に乗らなかった試織サンプルについては、3～5 年保存し、必要度の高いものだけを残して廃棄している。

3. 保管資料サンプルの内容・構成

同社のテキスタイルサンプルの保管数は、カーテン関係を中心に、一部ファッションテキスタイルも含めて約 15,000 点のサンプルを保管している。

4. 入手・保管の基準・方法

同社のテキスタイルサンプルの保存方針は、ビジネスに採用された織物のサンプルはすべて保管しており、これには設計書がすべて添付されている。試作サンプルについては、上述のように 5 年間保存した後、技術的に特徴のあるものを残して廃棄処分している。同社の場合、織物の糸使い、織組織等に加えて、全国に分散する協力染色工場の加工データ

等も保存している。

5. 保存の形態

保存サンプルは、すべて染色加工後のハンガーサンプル、原反を保存している。保存の分類整理は、用途別の年代別分類としており、主要サンプルはショールームに展示している。

6. 利用活用の状況

バイヤーとの商談で、バイヤーのイメージを明確にするためにテキスタイルサンプルが活用されている。テキスタイルサンプルは自社の技術・感性のノウハウの塊であり、自社で開発された過去の特殊技術のサンプルは、新しい織物の開発の発想を助けるものとして利用されている。

7. デジタル化への取り組み

国内のブック帳に掲載された商品、輸出された織物サンプルは、データベース化されており、商品開発のノウハウ情報がすべて記録されている。検索は、糸使い、柄、カラー、風合等あらゆる条件での検索が可能となっている。但し、試作サンプルについては、台帳管理で行っている。

8. デジタル情報の提供方法

9. デジタルの利用状況

特になし。

10. 保管に関する問題点、

約 50 坪の保管スペースを持っているが、これまで不必要なサンプルを廃棄してきたものの最近次第に手狭になってきており、スペースの拡張問題も含めてもう一度サンプルの利用状況を見直しながら、保存の方法を考えたい。

11. 他社・他機関への公会・開示

12. 維持運営の問題点

13. 他社とのネットワーク

特になし。

14. 繊維及び服飾ファッション資料の散逸状況への見解

(1) カネボウのコレクションとか本当に美術的価値のあるものは、行政、業界が総力を挙げて守るべきである。業界の商品開発のためのサンプル・センターを作ることは、

特に北陸の場合、余り意味が無く、美術館、博物館としてならそれなりの説得力が出てくると考えられる。

- (2) 北陸産地の織物は、ドビー組織、平組織が中心であり、染色加工の機能加工にしても数がそれ程多くなく、テキスタイルサンプルの必要性は織組織、糸使い等であり、各社毎の技術ノウハウが構築されている現在、産地の実態から考えてテキスタイルサンプル・センターに対する関心は薄いのが実情ではないか。他方、先染織物産地、プリント加工の比率の高い産地、ファッション分野の比率の高いジャカード織物産地は、流行のサイクルがあるので、テキスタイルサンプルの集積は意味があると思われる。

15．統括機関（設立された場合）への資料提供

廃棄するサンプルは、ほとんど焼却処分している。テキスタイルサンプルは外部には提供できない。

16．今後の計画

17．他社の繊維及び服飾ファッション資料に関する公開・開示の要望

テキスタイルサンプルは、バイヤー等のビジネス用であり、同業者には見せない。但し、デザイナー、学生等のテキスタイルを学ぶ人には、原則として公開する。

丸井織物株式会社

所在地	〒929-1801 石川県鹿島郡中能登町久乃木井部 15
電話	0767-76-1337
設立、資本金	昭和 12 年設立、資本金 57,184 千円、従業員数 300 人
サンプル保管開始年	昭和 50 年代以降、本格的にサンプル収集を実施
資料整理スタッフ	開発担当部門が担当
保管点数	約 40,000 点
ヒアリング担当者	宮本 徹（社長）、古澤久良（常務）

1. 資料・サンプルの継続保管を始めた経緯

裏地のタフタ等の専門織布工場として、量産定番織物の生産比率が高かったが、30 年前から生産商品の多様化が推進され、開発部門の強化と共にサンプルの収集が急増した。

2. 特徴的なこと

- (1) 丸井織物グループは、WJ 織機、AJ 織機等の革新織機を、丸井本社が 636 台、子会社が宮米織物 272 台、協力工場が 166 台、合計 1,074 台を保有し、月産 15 万疋を生産、このほか中国に丸井織物（南通）有限公司を 2004 年に設立し、我が国合繊長繊維織物業界の最大の生産力を誇る有力工場である。昨年、最先端のテキスタイル情報を発信する「TEXTILE STUDIO」を設置、北陸最大の床面積 1,400 m²のフロアに、約 30,000 点のハンガーサンプルを分類整理して展示、商談テーブル、品質管理のための検査設備も具えられ、商談促進の場として活用されている。同社は、東レのチョップ織物の生産比率が高く、近年、自販も積極的に展開している。
- (2) 同社は、徹底したコストダウン対策と、常時、新鋭ジェット織機の投資を活発に進め、日本国内で最強のコスト競争力を有している。パブル崩壊後、量産定番織物から多品種小ロット生産へ転換を進め、現在は「変種変量生産」へとフレキシブルな生産体制へ革新を推進している。また、マーケットインからカスタマーインへ、市場単位から客単位へのビジネスに転換を推進しており、自販にも力を入れている。「TEXTILE STUDIO」のテキスタイルサンプル展示・商談室は、北陸最大規模であり、同社に訪れるバイヤーの商談に利用されている。さらに同社の東京のショールームの設置は、丸井の個性的・独創的モノづくりを見せる場として位置付け、生地サンプルの現物を見せながらバイヤーのイメージを探る場として考えており、能登の本社の TEXTILE STUDIO へバイヤーを誘導する戦略を進めている。

3. 保管資料サンプルの内容・構成

収集テキスタイルサンプルは、すべて染色加工後のサンプルで、商売になってマーケットに流れたサンプル及び試織したサンプルが約 40,000 点保管されている。そのうち商談に

必要な約 30,000 点はハンガーサンプルとして、商談ルームの「TEXTILE STUDIO」でハンガーラックに分類して展示しており、このほか自社の歴史を物語るハンガーサンプル、原反等も収蔵棚で保管しており、サンプルの内容はこれまで製造してきたポリエステル織物、ナイロン織物、合織・天然繊維複合織物等である。

4. 入手・保管の基準・方法

サンプルの保管は、同社の歴史的に大切なサンプルは、創業以来、保管してきている。試織サンプルの保存は、1986 年からすべて保存しており、過去 30 年分のサンプルは常時活用できる状態で保管、それ以前のサンプルは収蔵棚で保存している。

5. 保存の形態

上述の通り。

6. 利用活用の状況

- (1) 「TEXTILE STUDIO」の約 30,000 点のサンプルは、アパレルメーカー、商社、デザイナー等との商談に活用している。アパレルメーカー等の川下業界では、近年、テキスタイルの分かるプロがいなくなり、企画担当者は若い人が多く、過去のテキスタイルの知識が少ない人が多い。そのため、バイヤーのイメージを引き出すためには、分類整理されたサンプルが必要となっている。また、売れ筋の商品でハンガーサンプルのみではイメージが明確にならない場合は、製品化して展示することを始めている（約 80 点）。
- (2) 社内の商品開発に活用している。開発に過去のサンプルがそのまま使えることはないが、織物組織、糸使い、風合、イメージ等に利用できる。展示されているサンプルとは別に、織物組織、糸使い等の詳細な分解設計書を添付したサンプルを品目毎に封筒に保管して、常時、商品開発に利用されている。

7. デジタル化への取り組み

保管サンプルのリストは、デジタル化している。糸種（経糸が軸）織組織、風合（ソフト、ハリコシ等）、染色（色調、光沢、ダル等）等の詳細な検索項目が設定されている。

8. デジタル情報の提供方法

自社の秘密に関するデータであるので、公開はしない。

9. デジタルの利用状況

10. 保管に関する問題点、

上述の通りで、特になし。

11．他社・他機関への公会・開示

12．維持運営の問題点

13．他社とのネットワーク

サンプル情報の公開は、ビジネス以外は公開しない。但し、学生等が勉強に訪れる場合は公開する。

14．繊維及び服飾ファッション資料の散逸状況への見解

織物工場等の廃業によって、テキスタイルサンプルの散逸が起こっており、これらの保存は団体及び公的な機関での保存を考えるべきである。

15．統括機関（設立された場合）への資料提供

これまで保管してきたサンプルは、提供できない。これから試織するサンプルの中で、有料で提供することもあり得る。

16．今後の計画

17．他社の繊維及び服飾ファッション資料に関する公開・開示の要望

- (1) 東京、大阪等の遠隔地で、サンプル収集センターができて、費用対効果の問題もあって利用度は低いと思う。
- (2) サンプル収集センターを設ける場合は、北陸長繊維産地、毛織物産地、綿織物産地にサテライト式に設置すべきであると考えます。
- (3) サンプル収集センターは、過去の文化を残すという芸術的なセンスでは利用度が下がるので、あくまでもビジネス・サポートの視点で、技術的に特徴のあるサンプルや売れ筋の商品であった過去のサンプルを収集することが必要である。また、サンプルが保管庫に置いてあって、リストを見て出してもらうというクローズ方式は駄目で、図書館式のオープンで気軽にサンプルが手にできることが肝要である。

稲山織物株式会社

所在地	〒912-0053 福井県大野市春日 64-50
電話	0779-66-3360
設立、資本金	昭和7年創業、資本金 45,000 千円
サンプル保管開始年	昭和40年以降
資料整理スタッフ	開発・営業担当者
保管点数	約 50,000 点
ヒアリング担当者	稲山幹夫（社長）

1. 資料・サンプルの継続保管を始めた経緯

同社は昭和40年以降の自社の合繊織物サンプルを保存している。

2. 特徴的なこと

同社は帝人の有力チョップ織布工場であり、子会社に亀城テキスタイル（織布）ニイナ（縫製）を持っている。同社は、化合繊撚糸織物生産が集積している大野産地の最大企業として発展してきており、昭和37年の帝人の指定工場になって以来、帝人の代表的な撚糸織物、新合繊織物、パラグラダー等の資材織物を開発生産してきた企業である。現在の生產品目は、ポリエステル高密度高機能織物、厚地紳士衣料用織物、ユフォーム（ワーキング）ポリエステル薄地ファッション織物、衣料用資材、工業資材、建築資材等の幅広い商品を製造している。同社は、北陸地域で最も大量の織物サンプルを保存している。

3. 保管資料サンプルの内容・構成

同社のテキスタイルサンプルの保管数は約5万点で、薄地・中肉・厚地、あるいはファッション、ユニフォーム、スポーツ、資材等のあらゆる分野のサンプルを保管している。

4. 入手・保管の基準・方法

同社のテキスタイルサンプルは、自社開発の織物サンプル100%である。販売ルートに乗ったサンプルと試織サンプルは、昭和40年以来、全数を保管している。

5. 保存の形態

保存サンプルは、染色加工後のハンガーサンプル、原反、台紙管理であり、重要なサンプルは商談に活用できるようにハンガーで展示し、その他は保管室で保存している。すべてのサンプルに、技術情報が添付されており、サンプルの分類は年代別で分類している。

6. 利用活用の状況

アパレルメーカー担当者のテキスタイルの提案力が落ちており、バイヤーのイメージを具体的に提示するにはサンプルが必要である。商品開発を行う場合、テーマによっては過

去のサンプルの技術データを応用すると開発が速くなり、またファッションサイクルの繰り返しもあり、過去のサンプルはそのまま使えないが、ヒントをつかむ上で利用している。

7. デジタル化への取り組み

商品開発にからむ織組織・糸使い等の技術情報のデジタル化は行っているが、サンプルリストはすべて台帳管理であり、リストのデジタル化は行っていない。サンプルの閲覧は、現物を触ることである。デジタル化は、現段階では人手もかかり、あまり意味はないが、保管点数が今後も増えることから、将来的にはリストのデジタル管理を考えたいと思う。

8. デジタル情報の提供方法

9. デジタルの利用状況

10. 保管に関する問題点、

特になし。

11. 他社・他機関への公会・開示

バイヤー以外の公開は、企業秘密があるのでできない。学生が勉強に訪れる場合は、公開しても良い。

12. 維持運営の問題点

13. 他社とのネットワーク

特になし。

14. 繊維及び服飾ファッション資料の散逸状況への見解

特になし。

15. 統括機関（設立された場合）への資料提供

試織のテキスタイルサンプルは、技術の秘密の面で有料でも提供はできない。

16. 今後の計画

17. 他社の繊維及び服飾ファッション資料に関する公開・開示の要望

各企業は、それぞれ生産分野の個別化・商品の個性化を進めており、商品開発のノウハウは自社内にあり、他人のサンプルは参考にならない。各社はプライドもあり、他社のサンプルを参考にすることはしなくなっている。したがって、サンプル・センターのようなものを国が作っても利用度が低いのではないか。各企業は皆、ノウハウの詰まっているサンプルは出さないの、意味がないと思う。但し、古いもの、伝統的なものを集めて美術館、博物館を作る発想なら、文化的な面で異なる評価がなされると考えられる。

小林当織物株式会社

所在地	〒376-0035 群馬県桐生市仲町 1-4-29
電話	0277-44-7135
設立	1950年
運営規模	
施設規模	約 330 m ²
スタッフ	随時
保管点数	20,000 点
ヒアリング担当者	猪熊明（取締役部長）

1. 資料・サンプルの継続保管を始めた経緯

同社は、ジャカード機、ドビー機による複合繊維使いの高級婦人服地を主に製造販売している。多種多様な合繊や天然繊維及びその複合繊維を駆使した、複雑かつ高度な製織技術と洗練された感性は、高級婦人服業界から高い評価を受けている。

同社には、過去に製織した 2 万点を超す織物見本が保存されており、話が国の織物史、ファッション史の貴重な資料として、また、独自の販売戦略リソースとして保存活用している。これは先代社長が繊維意匠や製織技術を継承できるようにと、自社製品を継続的に保管していることが理由。

2. 特徴的なこと

創業時からの自社製品を保管しており、その数は 2 万点を越える。

3. 保管資料サンプルの内容・構成

すべてが自社製品であり、一部、アパレルにした製品サンプルが保存されている。ジャカード製品は、いまではオールド・コレクションになるような精密な柄もあり、その数と並んで多様な製品は貴重なアーカイブとなる。

4. 入手・保管の基準・方法

すべてが同社の製品。保管されたアーカイブには、個別に糸づかいをはじめ、設計番号、紋紙番号、外注先など明記されており、色は配色別に分類されている。これは製品の復元を目的にしたもので、分類は 60 種に及ぶ。

5. 保存の形態

同社の施設内に保管しており、本社屋に隣接したところに資料室がある。このほか本社屋内にも保管スペースがあり、アーカイブの多くはハンガー見本の状態で、年代別に 3 段式のスチールハンガーで保管されている。保存状態に空調設備はなく、同社でもアーカイブの劣化を心配している。

6. 利用活用の状況

新しい製品企画の参考にするため、同社の企画担当者が利用しており、デザイナーにとっては欠かせない資料となっている。このほか、取引先との商談でもアーカイブをみながら製品開発することも多い。一般への公開はしていないが、ファッション系専門学校の見学や教員研修などには公開している。

7. デジタル化への取り組み

2004年に中小企業整備機構の支援を受けてデジタル化に着手したが、写真の精度が低いことと、入力作業が煩雑なため現在は休止している。そのときに作成したのは100点程度で、ほとんど利用されていない。

8. 保管に関する問題点

保管スペースが手狭になり、古いアーカイブを廃棄しなければ、新たなアーカイブが収蔵できなくなっている。

9. 他社・他機関への公開・開示

自社の製品開発や取引先との商談に利用することが目的のため、今後も一般公開は考えていない。また、他社・他機関への公開も原則的に行わない考えである。

熊沢商事株式会社

所在地	〒910-0023 福井県福井市順化 1-9-7
電話	0767-23-1872
設立、資本金	昭和 25 年 1 月設立、資本金 45,000 千円、従業員数 33 人
サンプル保管開始年	創業以来、サンプルの保存は 5 年以内。
資料整理スタッフ	事業部 1 名が担当
保管点数	約 3,000 点
ヒアリング担当者	熊澤喜八郎（社長）

1. 資料・サンプルの継続保管を始めた経緯

産元商社は、テキスタイルサンプルがビジネスの種であり、創業以来、サンプルの保管は絶えず行っているが、基本的には 5 年毎に古いサンプルは廃棄している。

2. 特徴的なこと

- (1) 同社は、直営の生産工場を持たない典型的な産元商社である。福井産地の産元商社 120 社のうち売上高は第 4 位の商社であり、和装用の絹織物及び人絹織物の販売で創業を開始し、昭和 50 年前後にはアセテート・ポリエステル之交織のレディース・ブラックフォーマル用織物を販売、以後、傘下にレピア織機の織布工場を抱え、商品企画に力を入れ、トリアセテート複合の小ロット多品種の高級ファッションテキスタイルを販売している。
- (2) 同社は、三菱レイヨンとの取引関係が深く、また、マーケットインには熱心で、早くから東京市場へ進出し、社員の半分は東京支店駐在である。同社の取り扱っているトリアセテート・天然性複合織物は、ミセスゾーンのスーツを中心とした高級織物で、北陸産地では最高級に属するファッションテキスタイルである。徹底したマーケットインに根差したビジネスを展開していることから、テキスタイルサンプルに対して製造業者とはやや異なる見解を持っている。

3. 保管資料サンプルの内容・構成

収蔵テキスタイルサンプルは、すべて染色加工後のサンプルであり、新作商品が 2,000 点、これまでビジネスで流れた商品が 1,000 点、アパレルサンプルが 100 点で、テキスタイルサンプルの点数は 3,000 点と比較的保管数が少ない。

4. 入手・保管の基準・方法

同社の営業方針は、現在売れている商品の動向と、今後予想される消費動向にすべてを集中しており、ビジネスの種であるテキスタイルサンプルの保管期間は 3 年までで、長くても 5 年を限度にしている。同社企画による傘下工場で作成されたサンプルは、すべて 3 年間は保存している。なお、ヨーロッパで購入したサンプル（プルミエール・ヴィジョン

等の展示会)は、原則として保存はせず、製品サンプル(ブランド品)は保存している。

5. 保存の形態

保存サンプルは、すべて織組織・糸使い・加工方法等の設計書が添付されており、これらはハンガー、着分、原反、台紙等で保管され、ハンガー約 8 割を占めている。サンプルの分類は、トリアセテート、キュプラ、ポリエステル等の経糸を軸にして整理しており、年代別、売り先別でも分類している。

6. 利用活用の状況

- (1) アパレルメーカーからのテキスタイルの企画提案は、一部のアパレルメーカーを除いてほとんど行われなくなっている。大手商社からの企画提案も少なく、一部のテキスタイル商社のみがアイデアを出してくる状況である。産元商社は、川下との接点の薄い中小織物工場及び染色工場と川下バイヤーの間に入って、積極的に新しいアイデアを提案することが、重要な仕事になっている。
- (2) 一般的なテキスタイル・ファッションの情報は、ヨーロッパから十分に流れてきており、ポイントは、独自の企画提案をどう練り上げるかが問題となっている。同社の場合、営業が得意先を回り、街頭の流行、店頭の売れ筋を探っている過程でヒラメキが生まれており、そのヒラメキ情報を基にして、企画開発スタッフが糸使い、織物組織、風合加工等の開発を行っている。過去のサンプルの活用は、あくまでも近年のテキスタイル・ファッションの流れと、アディアの類似品の設計書を見るために活用しているのみである。過去のサンプルからはアイデアが出てこない。たとえ出たとしてもまれなケースと言える。
- (3) バイヤーに対する基礎的な開発サンプルの提案は、シーズンインの 9 ヶ月前であり、本サンプルの提案は 6 ヶ月前である。昔と違って期近取引がどんどん進んでおり、直近のトレンドでビジネスが展開されるために、早くから開発して用意しても意味がなくなりつつある。以前は大きなトレンドを見て商品企画を行ってきたが、今は企画提案も、受注も納品もすべてクイック化したために、過去のサンプルを参考にして開発を行うという手法が、時間的にも直近の消費需要の変化に対応する上でも、次第に意味をなさなくなりつつある。

7. デジタル化への取り組み

保管サンプルのリストは、台帳管理している。デジタル化を行う必要性を全く感じていない。

8. デジタル情報の提供方法

9. デジタルの利用状況

10．保管に関する問題点、

特になし。

11．他社・他機関への公開・開示

12．維持運営の問題点

13．他社とのネットワーク

特になし。

14．繊維及び服飾ファッション資料の散逸状況への見解

テキスタイルサンプルは、北陸の場合ドビー織が中心であり、各織物工場がそれぞれの技術とアイデアで苦心して開発しており、技術的に保存すべきものは、しかるべき機関で保存すべきである。商品開発のためにテキスタイルサンプルセンター的なものを作っても、業界の利用度が低いと思う。もし、センターを作るなら東京が良いと思う。但し、当社の社員が利用するのは年1回程度と思われる。

15．統括機関（設立された場合）への資料提供

これまで保管してきたサンプルは、基本的には提供できない。定番的なサンプルは状況に応じて有料で出せるが、開発的なサンプルは自社の秘密があるために出せない。

16．今後の計画

17．他社の繊維及び服飾ファッション資料に関する公開・開示の要望

特になし。

お わ り に

日本の繊維産業においては、独自のクリエイションの水準を高めるとともに繊維ファッション業界の次世代を担う人材育成の基盤づくりの一環として、過去の優れたデザイン、匠の技で生み出された素材やアパレル製品の現物見本、データを体系的に収集蓄積した「繊維アーカイブ」の整備を行い、より多くの人に活用される仕組みを作ることが必要とされています。

しかし、サンプルの集積・閲覧のみの繊維アーカイブでは、せっかくの宝の山も無駄であり、人材育成はおろか、繊維ファッション産業全体の有効な活性化策につながりません。先人の貴重な遺産・資産が残っている今こそ、繊維ファッション業界にとって今何が必要なのか、そして日本の繊維産業の技術・ノウハウ・文化を後世に残すには何をすれば良いかの総合的視点での取り組みが本プロジェクトには求められます。つまり、日本の繊維アーカイブは、単なる資料集積という静態的なものを超えて、新しい商品開発、プロダクト・イノベーション、技術継承、人材育成、人材交流、産官学の連携活動などに具体的につながる可能性を持った繊維ファッション産業の総合対策を担う基幹施設を目指すべきであると考えます。

日本のテキスタイルを世界の有力デザイナーが認めている今こそ、繊維アーカイブの整備・充実・強化を通して、コスチューム・デザインはもちろん、若い人たちにモノづくりの夢をテキスタイルから感じてもらう取り組みや提案・発信が求められています。

このような背景のもと、本年度は、既存アーカイブ機関（企業を含む）の繊維サンプル収蔵の現状やニーズをヒアリング調査等でしっかりと把握し、それを踏まえて、繊維アーカイブの全体構想とアーカイブ整備上の課題と問題点を整理しました。本書が将来的な構想実現に向けての手掛かりになればと考えております。

今後、繊維ファッション業界の次世代を担う人達のためにも、本プロジェクトの構想実現に向け、一步一步継続的に積み上げていくことを切に願っております。

平成20年3月

「繊維アーカイブ調査委員会」

委員長 深井晃子